令和４年11月24日発行　第49号

千葉大学工学同窓会々報　49

2022

総合工学科

建築学コース　都市環境システムコース　デザインコース
機械工学コース　医工学コース　電気電子工学コース
情報工学コース　物質科学コース　共生応用化学コース

2021年、千葉大学工学部は
創立100周年 を迎えました

※工学部改組に伴い、学科からコース制となりました。各部会とコースの対応についてはp.24をご参照ください。

千葉大学工学同窓会
ホームページ　http://chiba-kougaku-dosokai.jp/

会長挨拶

工学同窓会会長　橋本浩行　HIROYUKI HASHIMOTO

卒業年／昭和59年　千葉大学工学部工業化学科卒業
昭和61年　千葉大学大学院工学研究科修士課程修了
平成17年　千葉大学大学院自然科学研究科　博士（理学）

100周年記念事業および工学同窓会活動へのご支援にまずは感謝申し上げます。前者については実行委員長の小圷成一教授を中心に推進しており、多くの教職員の先生方のご支援を頂きながらまずは早期の100年史発行を目指しています。一方で、記念講演会・記念祝賀会などは社会情勢を考慮し来年度以降に延期となっています。工学同窓会活動につきましては幹事長の上川直文教授を中心に、こちらも多くの先生方の協力を得て進めています。活動内容はほぼ例年どおりであり、主な数字をピックアップすると、予算規模が約1,000万円、収入の内訳は入会金と会費で約800万円、寄附金が約200万円、主な支出は会報編集発行費が約500万円（12月上旬に約24,000部を発送）、入学・卒業記念品費が約100万円、学生活動支援費が約100万円となっています。上記の事業および同窓会活動は教育・研究で多忙な先生方のボランティアで成り立っております。この紙面を借りて厚く御礼申し上げます。

千葉大学のトピックスについて触れますと、2022年度の志願者数は10,631人（募集人員は2,069人）であり、13年連続で１万人以上となりました。大阪公立大学が誕生したため「国公立大学の中で志願者数１位」は昨年度までの６年連続で途切れましたがそれでも立派な数字です。千葉大学を志願した理由について調べてみますと「教育内容が良い」「学習環境が整っている」の二つが多く、これは教職員の先生方と大学関係者による長年の努力によるものといえます。これまでのご尽力に敬意を表するとともに、千葉大学の価値が一層向上することを期待いたします。

さて、世の中は新型コロナ感染症の収束が未だ見えず、ロシアによるウクライナ侵攻や元首相の暗殺などの暗いニュースが続きますが、私たちは前を向いて生きていかなければなりません。ここでは上記のニュースには触れずに「シニアがんばりましょう」と「千葉大学のつながり」をキーワードとして日頃思っていることをお話しいたします。なお、私自身に関わる内容が中心になることを予めお断りしておきます。

少子高齢化は日本が持つ大きな課題ですが、一方でこれは多くの知識や経験を持つシニアがたくさんいることを意味します。活力のある日本を創り、地域を活性化するためには次世代を担う若い方々の力は当然必要ですが、シニア世代が「もう少しがんばること」も必要と思っています。私は昨年60才定年となり、その後縁があって一般社団法人シニア起業支援機構（J-SCORE）の会員となりました。J-SCOREは実務経験豊富な産・学・官の出身者が、その智慧と経験と人脈を活かして設立前後の起業家を支援し、起業を早期に成功させ、またこれを社会システム化することを目標としています。加えて、シニア自身が生涯現役として活躍する場を自ら創出し、生き甲斐とモチベーションを獲得し、平均年齢と健康年齢を近づけることも目指しています。79才になる代表理事の松井武久氏はバイタリティーがあり、私は大きな刺激を受けました。J-SCOREは基本的にはボランティア団体ですが、有償のコンサルティング事業も行っており、私自身の技術コンサルタントの仕事の一部はJ-SCORE経由で得たものです。J-SCOREにご関心のある方は是非ホームページをご覧ください。

話は変わりますが、自宅の裏山に絶滅危惧種のキンランが群生しており、ここに宅地を造成する計画が具体化したため３年前に隣家と協力し裏山約200坪を購入しました。その後キンランについて調べたところ、千葉大学教育学部の大和政秀教授がキンラン研究の第一人者であることがわかり、早速大和先生にコンタクトをとりキンランの保護についてご指導を受けました。３年間の保護活動により、キンランの株数は約３倍となり本年は60を超えました。本年８月にはJ-SCORE内にキンラン保護研究会（非営利）を設け､大和先生が技術顧問、私が会長として保護活動を推進することになりました。キンランは樹木、菌根菌と共生する菌従属栄養植物であり（菌根の世界、築地書館）、４月下旬に綺麗な花を咲かせます。ご関心のある方はこの研究会に連絡してください（hashimoto@j-score.or.jp）。

技術コンサルタントの仕事でもお付き合いをしている企業の方から実は私も千葉大学出身なのですよという話を聞くことが多くなりました。やはり同じ大学出身となると親近感が生まれます。このようにアカデミアや産業界で活躍されている千葉大学出身者がとても多いことを実感しており、千葉大学OG・OBのつながりがもう少しあってもよいと思っているところです。

現役の学生へのアドバイスとしては、コロナ禍で制約がありますが多くの方とコミュニケーションをとることをお伝えしたいです。私は数年前に学生時代のバンド仲間による活動を再開しました。長い空白期間がありましたが学生時代の友人はやはり特別であり本音で語り合えます。

まとまりのない文章となってしまいましたが、最後に皆様方の工学同窓会活動への一層のご支援とご協力をお願いして私の挨拶といたします。

■経　歴

1984年３月	千葉大学工学部工業化学科卒業
1986年３月	千葉大学大学院工学研究科修士課程修了
1986年４月	三井石油化学工業㈱入社
1986年10月	通商産業省軽質留分新用途開発プロジェクト研究員（兼）　※1991年６月まで
1992年５月	キヤノン㈱入社
2012年７月	キヤノン㈱技術フロンティア研究センター部長
2016年４月	千葉大学大学院博士後期課程客員教授（兼）　※2021年３月まで
現在	一般社団法人日本シニア起業支援機構（J-SCORE）シニアコンサルタント、SISup代表 など

ご　挨　拶

千葉大学工学部長　佐藤之彦　YUKIHIKO SATO

昭和38年　新潟県新潟市生まれ
昭和63年　東京工業大学大学院理工学研究科電気・電子工学専攻修士課程修了
博士（工学）（東京工業大学）

平成29年４月の工学部と理工系の大学院の改組と同時に工学部長に就任し、６年目を迎えました。本年３月に、この改組後の新しい体制の下での２回目の学部生を卒業生として送り出し、新しい教育組織が定着してきました。

ここ２年間、新型コロナウイルス感染症拡大の状況下での千葉大学の状況をお伝えしてきましたが、今年になっても感染拡大の波が訪れる状況は続いており、このことに触れないわけにはいきません。コロナ禍初年度の令和２年度は、何もかもが初めての事態であり、卒業式や学位記授与式、入学式などの大人数の集まる行事はすべて中止となり、４月の授業開始を５月のゴールデンウィーク明けに遅らせるなどの大きな変更がありました。また、学内への入構が制限され、第２タームまで（７月末まで）の授業はすべてオンラインで実施し、対面での授業は全面的に中止となりました。

その後は、これまでの経験を踏まえて、一般的な感染対策を徹底しながら、少しずつ以前の状況を取り戻しながら今日に至っています。令和３年の３月に対面で行われた卒業式や４月の入学式は、大学全体の学部や学府・研究科を２つに分けて２部制とし、１回あたりの参加者数を減らす措置が講じられましたが、令和４年の３月の卒業式や４月の入学式では、大学全体の学生が一堂に会する従来の形態に戻すことができました。しかし、学生のご家族の列席は叶わず、代替措置としての式典のインターネット配信が引き続き実施されました。

一方、授業については、講義室の学生の収容人数の制限が徐々に緩和され、令和４年６月からの第２ターム以降は講義室の定員で授業を行うことができるようになりました。２年前は、平日の昼間だというのにキャンパス内に学生が全くいないという異様な光景に、この先一体どうなるのかという不安を感じましたが、本年度は以前のような活気が戻ってきています。また、研究室における研究活動についても、実験室での実験や対面での研究指導など、ほぼ以前の状態に戻ってきました。しかし、研究室内での歓迎会や送別会、親睦のための飲み会など飲食を伴う集まりについては、まだ再開するに至っていません。私の研究室でも、もう２年半以上も研究室内での飲み会や卒業生や修了生を招いたOB会などを全く開催しておらず、学生との心理的な距離を縮めたり、OBとのつながりを維持する機会が持てなくなっています。こうした行事は、やはり対面で行うことに意味があり、状況を慎重に見極めながら、再開できる日を心待ちにしています。

こうしてコロナ禍に振り回されているうちに、千葉大学工学部は2021年に創立100周年を迎えました。千葉大学工学部の前身「東京高等工藝学校」は、1921年12月に官立専門学校として東京市新芝町（現在の東京都港区田町）に創立されました。その後1944年に「東京工業専門学校」と改称され、終戦後1949年５月には、学制改革として公布された国立大学設置法により生まれた新制「千葉大学工芸学部」の母体となりました。翌年、千葉大学「工芸学部」は「工学部」と改称され、今日に至っています。この創立100周年の節目に、千葉大学工学部では工学同窓会のご協力により、「工学部100年史」の発行や記念講演会、記念祝賀会の開催などの100周年記念事業を準備しています。100周年はまたとない重要な節目であり、対面での記念行事を縮小版ではなくフルサイズで行いたいとの方針から、100周年を迎えた2021年での実施を見送り、それが実現可能な時期を見定めている状況です。工学部100周年を意義あるものとして歴史に刻むためにも、工学同窓会の多くの皆様の温かいご支援を賜りたいと考えております。ご寄附につきましては『千葉大学基金』のHPをご覧いただければ幸いです。

コロナ禍により、社会全体でのコミュニケーションのオンライン化が急速に進みましたが、このことは卒業生の皆様と大学の日頃の距離が縮まったとも考えており、卒業生の皆様の参画を得た新しい教育の機会なども広がるのではないかと期待しています。今後とも、工学同窓会の皆様のご理解、ご支援を賜りたく、宜しくお願いいたします。

建　築　学　コ　ー　ス

■ 退職のご挨拶

千葉大における26年間の活動を振り返る

教授　Martin Norman Morris

私が「千葉大学工学部建築学科」に講師として就職したのは、1996年４月１日でした。研究分野は建築の歴史で、語学ではない専門の外国人として、自分の専門を日本の大学で教える機会をいただき、大変光栄に思っておりました。勤め始めたとき、日本の国立大学ではめったにないことだったそうで、尚そのように思いました。文部省から奨学金をいただき、母国のイギリスから来日し、1983年～1992年、東京大学の建築史研究室において留学し、修士も博士も東大で取得しましたが、千葉大学に入り、本格的に国立大学の学部教育に出会うこととなり、かなりのチャレンジと感じました。少しずつ進める方法を見つけて、次第に昇格し、2007年から教授になりました。

あの最初の春から、26年間が経ってしまい、2022年３月の末、定年退職となりました。振り返ってみると、授業を作成して教える機会と、セミナーにおいて学生や院生の個人研究の指導にかかわる機会と、研究活動を続けて・広げて・深める機会を伴い、私にとって、三つ合わせて、図り切れないほど豊富な経験と感じております。

それぞれが、どのように豊富な経験になったかを簡単に述べると、第一の授業の場合、建築史の基礎的な領域、日本建築史、世界建築史、都市計画史、近代建築史と私の修論と博論の研究テーマに当たる住宅史の全て及びそれらと深いかかわりを持つ古建築の保全と再生について、建築を学んでいる学生に講義する機会を持っておりました。また普遍教育において、建築を専門にしていない学生たちとも、建築と文化の関係性や、日本建築のエッセンスと位置づけについて、授業を通して、考える機会を持っていました。講義をするというのは、その主題について、情報を整理、重要とみられる話題を引っ張って、ストーリーを組み、色々な説と自分の意見を合わせて、限られた時間以内に発表しようとするものです。最初からうまく行ったとは限らず、特に自分の母国語ではない言葉で伝えようとするのは単純ではなかったです。遅くなりますが、わかりにくかったところ、当時の学生さんにお詫びいたします。しかし、年々経験が増える中、説明するとき、新たに気づく点が毎回浮かんできて、見方を発展させる貴重な基盤となりました。

講義形式の授業とは別に、建築学コースの独特な設計課題の授業を担当する機会もありました。その中で、古建築の保全･再生と活用､古建築（伝統的民家）の測量･野帳における記録方法及び基礎的な図面作成、フレームを表す模型作成、テーマを付けた建物のイラスト（アクソメ）の作成からなった課題では、学生から色々な提案が出され、感動した提案も多かったです。最後に、普通は夏休みの最後の週を利用して、建築学コースの３年生の応募者を京都・奈良などを中心に、見学旅行を実施しました。学生だけでなく教員にも、名建築を目の前にすると、気づくことが多く、楽しいだけでなく、大変参考になる経験でした。

次に、第２にありがたいと感じたのは、学生さんの卒論や修論等の指導です。研究室の調査の延長のテーマであれ、学生自身が選んだテーマであれ、資料やデータからパターンを見出し、ストーリーが整えられるプロセスに関わる機会を持つことは、色々な意味で指導する側にも大いに参考になりますし、よい論文が形になる過程にシェアすることも素晴らしい経験です。

最後に、自分の研究活動を続ける機会をいただいたことも、勿論、大変貴重なものとして感じております。博士論文を書くにあたり、社会制度における身分差が住宅に如何に現れ、住宅の発展において興味深いと思った歴史的プロセスを追いかけることとし、千葉大に入ってから、論文及び学術講演等を通して、その中から幾つかの場面を更に発表できました。しかし、全体を出版物としてまとめるところにまで及んでおらず、それは私にとって重要な作業として残ります。また、実際に最初からの目標の一つとなっていましたが、その延長で、比較文化論の構築とそれにおける日本建築史に関する研究の結果の取り入れという大きな課題も待っています。大学院生の時代からの研究と並行して、色々な調査等に関わり、その調査の延長での研究発表の機会を得て、そのおかげで視野を広くする機会を多くいただきました。

更に、実際に、研究テーマとは言えないのですが、2008年に、東北大学で開催された「次世代に残すアジアの文化と技術」を題としたシンポジウムに参加し､「夏草に戻れる都市」というタイトルの発表を行い、その中で、私は日本の伝統的木造建築の無視されがちながら重要と感じた特徴として、深い基礎なしで、地面に

軽く座るということを取り上げました。軽く座ったということで、古代の都から中・近世の城下町まで、都市を動かすことを楽にしただけでなく、残された跡地をすぐ農地や自然に返すことを可能としました。それは、深い基礎をどうしても伴う現在の都市開発と対照的で、再検討に値する特徴であると指摘しました。省きやすさを「足跡の軽さ」と呼び、「再利用のポテンシャル」と「基本素材の自然発生と自然分解の特徴」と合わせて、サステナビリティの観点から大変優れた性格として評価すべきと強調しました。日本をはじめとして、アジアからヨーロッパまでの歴史における木造建築の伝統を見ると、似たような性格が見いだされ、環境問題が無視できなくなる中、これからの建設と都市調整を考える場合、大いに参考にすべきと思い、その認識の広がりにこれからも関わりたいです。

26年間、多くの方に大変お世話になりました。日本語が限られた外国人として、大学運営等に日本人の教員ほど関わることができなかったことが、特に同コースの先生方の負担を増やす原因になったと思っており、これを機会に、お礼とともに、お詫びも申し上げます。

■ M. N. モリス教授最終講義　報告

2022年３月６日（日）16:30－19:00、M. N. モリス先生の最終講義を開催しました。コロナ下であることから、Zoom配信としましたが、100名以上の参加がありました。先生のご講義は「建築史学の役割と重要性 Answering Henry: The role and importance of architectural history」と題したもので、「歴史」と「建築」の定義にはじまり、建築史の役割と重要性をお話いただきました。

建築史を通して、過去の建築から人々の生活や思想を読み解くことができるのみならず、過去の建築を使い続けるための知恵・デザイン・ソースが提供されることを、さまざまな事例を用いて説明していただきました。人類のみならず生物全般の壮大な進化の歴史から建築史の役割と重要性を教示いただく講義で、モリス先生の浩瀚な知識と文化文明に対する深い洞察に大いに感銘を受けました。

その後、会場の玉井哲雄・国立歴史民族博物館名誉教授との対談、岩瀬建築有限会社代表取締役岩瀬繁氏、伊藤毅・東京大学名誉教授、安藤正雄・千葉大学名誉教授からのコメントがあり、さらに、堀江亨・日本大学生産工学部教授からはイギリス調査時の写真をご披露いただきました。

最後に、会場でZoom配信の実務を支えてくれた歴史研究室の学生のほか、モリス研OBOG（今関俊さん、淺田なつみさん、ラドゥレスク・ラルカさん）にも心より御礼申し上げ、モリス先生最終講義の報告とさせていただきます。なお、最終講義の内容は活字化を予定しています。

（建築学コース准教授　頴原　澄子）

■ 学生・教員の受賞と活躍（学年は受賞時）

2022年 日本建築学会「優秀卒業論文賞」
・中山征人（平島・戸塚研、修士１年）
2021年度日本建築学会大会「若手優秀発表賞」
・丹羽悠華（松浦研、修士２年）都市計画部門
・中村恭久（吉岡研、修士１年）建築計画部門
・伊能良太（吉岡研、修士１年）建築計画部門
・菊地毅之（平島研、博士２年）防火部門
・真野英士（平島研、修士１年）防火部門
2021年度日本建築学会「情報シンポ若手優秀発表賞」
・中村恭久（吉岡研、修士１年）建築計画部門
2021年度日本建築学会 関東支部研究発表会
「若手優秀研究報告賞」
・石田雄大（平島・戸塚研、修士２年）防火部門
日本建築学会関東支部第22回提案競技「最優秀賞」
・安森亮雄（教員）、附田悠杜、星野結妙、宮地遼也、
村山香菜子（安森研、修士１年）
2021年度日本造園学会 関東支部大会「奨励賞」
・池田和樹（湯淺研、学部４年）口頭発表部門
2022年度日本火災学会「学生奨励賞」
・中山征人（平島・戸塚研、修士１年）
第９回ヒューリック学生アイデアコンペ「優秀賞」
・森田雅大（岡田研、修士１年）
第15回長谷工住まいのデザインコンペティション
「佳作」
・森田雅大（岡田研、修士１年）
あずま百樹園 新設トイレ アイデアコンペ「最優秀賞」
・村山香菜子、星野結妙（安森研、修士１年）
すみだアーバンデザイン・アイデアコンペ「最優秀賞」
・池田和樹（湯淺研、学部４年）
第11回 子どもまち・いえワークショップコンペ
「最優秀賞」
・伊藤研究室×東京学芸大鉄矢研
第２回 隈研吾&東川町」KAGUデザインコンペ
「優秀賞」
・幾本セサル（伊藤研、学部４年）
Cリーグ「最優秀賞」
・石田開（伊藤研、学部４年）
NHK「日本最強の城スペシャル第11弾」出演
・鈴木万里奈（松浦研、修士２年）（2022/5/5）
第28回千葉県建築文化賞「優秀賞」
・伊藤潤一 助教

都市環境システムコース

■ 都市環境システムコースだより

学部コース長（学科長）（教授）村木　美貴

卒業生の皆様、こんにちは。2022年度、都市工学コースの学部コース長を務めます村木美貴です。都市環境システムコースがミニ工学部としての役割を終えて、より都市の創造に貢献する学術・教育研究を行う都市工学コースとして、新しくスタートしました。常勤の先生方で他コースに移られた先生方、また、定年により退職された先生方の存在からも、現在は16人と非常に少ない教員でコース運営をしています。しかし、機動力を高めて、魅力ある都市工学コースになるよう、先生方と協力しながら運営していきたいと思います。これが、もっとも大きな2022年度の変化と言えます。

学部の３年生以上は都市環境システムコース所属の学生たちであり、また、都市工学コースへの移行が年次進行で進むため、大学院も都市環境システムコースが暫く続くことになります。そのため、他コースに移られた先生方も都市環境システム学科の学生については、引き続き、講義や演習をご担当いただき、また、卒業研究の学生を受けるなど、学年により違いがある変則的な対応を行っています。

私自身、今年度の春に行われた学部コースの編入試験では都市環境システムコースを名乗り、また、学内の会議では都市工学コースの名札の前に座るなど、対応する行事に応じて名称を使い分けなければならず、戸惑うことも多い状況です。

都市工学の幅を広げるためにも、現在、工学研究院に不在の交通計画分野の教員を公募し、来年春には新しいメンバーを迎える予定です。これも新しい取り組みです。

これまでも当コースでは交通に関心を持つ学生たちがたくさんいましたが、その需要に対応できる専門スタッフが不在でした。新しい人材を都市工学コースに迎えることで、学生のニーズにも合った運営ができるようになる上に、自動車関連の研究をされていらっしゃる他コースの先生方との連携も可能と考えています。高齢化社会の中で地域交通にどう対応していくか、また、自動運転が進んできた際に、どのような新しい交通システムを都市の中に導入していくのか、様々な側面での課題があります。新しい専門家を迎えることは、都市工学コースの幅を広げることにつながる上に、教員間でも新しい研究や教育にチャレンジできることになると期待しています。

大学キャンパスは、コロナの影響が未だ続く状況にあり、人の姿がまだ少ない状況ではありますが、対面で行う実験や演習も存在し、また、研究室に配属されている４年生以上が参加するゼミでは、十分な換気を行いながら対面での教育・研究を行う光景が多く見られます。私自身の研究室でもゼミは対面が大事だと考え、2020年の後期から広い部屋を利用して行っています。ただ、講義科目の多くはオンラインで行われることが多い状況が続いています。学部学生の中には、オンライン講義の場合、講義を聞く時間も自由で、自分の時間を自由に使えるというポジティブな意見も見られます。そのため、今後、どのような形で学生に対応していくのが良いか、検討していくことが大事だと思っています。

今後の感染状況にもよりますが、今年度も、卒業研究、卒業計画発表会もオンラインで実施する予定にあります。今後のコロナの感染状況を注視しながら、最も適切な方法を採っていきたいと考えています。

最後となりましたが、卒業生の皆様の益々のご健勝とご活躍をお祈り申し上げます。また、都市環境システムコース、都市工学コースへのご指導・ご支援を引き続き賜りますよう、教員を代表してお願い申し上げます。

（むらき　みき）

■ 学生の受賞（2021.7 ～ 2022.8）

- 橋川遼人君（和嶋研Ｍ１年）が、2021年７月１日、令和３年化学工学会秋田大会にて優秀学生賞を受賞。
- 湯旭東君（劉醇一研Ｄ１年）が、2021年７月１日、令和３年化学工学会秋田大会にて学生奨励賞を受賞。
- 桑折奎吾君（丸山・劉研Ｍ１年）が、2021年10月８日、令和３年度土木学会全国大会第76回年次学術講演会にて優秀講演者を受賞。
- 橋川遼人君（和嶋研Ｍ１年）が、2021年10月22日、国際会議 The 9th International Conference on Materials Engineering for Resources（ICMR）にて Excellent Poster Award を受賞。
- 湯旭東君（劉醇一研Ｄ２年）が、2021年11月27日、オンラインで開催されました The 10th Joint Conference on Renewable Energy and Nanotechnology（JCREN2021）にて Best Paper Award 2nd Prize を受賞。
- 香川弘斗君（和嶋研Ｂ４年）が、2022年３月10日、日本海水学会 第13回学生研究発表会にて優秀賞を受賞。

■ 定年退職の先生

思いも寄らなかった病気との闘い

須貝　康雄

昭和61年４月に電気電子工学科に助手として着任し、36年間勤務しました。都市環境システム学科には平成10年の学科設立と同時に移り、24年間を過ごしました。学部と修士もそれぞれ電子工学科､電子工学専攻を卒業･修了しましたので、学生時代を含めると千葉大学には40年以上お世話になり、令和４年３月に定年退職いたしました。

この間、病気らしい病気もせずに病院とはほぼ無縁でしたが、定年間際の最後の何年間は病気との闘いの日々となってしまいました。平成30年２月の修士論文発表会でのことです。この頃、学部も修士もポスター発表会の形式をとっていました。修士の発表会では教員何人かでグループを作り、学生の研究内容を審査するのですが、その最中に鋭い痛みを背中に感じました。発表会は週末で翌週になっても痛みが取れないため、レントゲン検査をした結果、背骨の一部が欠損していて骨折と診断されました。その後、痛み止めの薬とリハビリで過ごしていましたが、新年度に入ってすぐに背中の痛みが腰痛にも拡大したため、医療用コルセットを装着して授業や学内の仕事をこなしていました。

そんな中、強い痛み止めのせいかどうかわかりませんが、令和元年11月初旬、腸に穴が空き（S状結腸憩室穿孔による急性汎発性腹膜炎)、救急搬送にて病院で緊急手術を受けました。後で家族から聞いた話では、集中治療室に２週間、手術は３回に及んだそうです。約１ヶ月の入院とその後のリハビリの期間を経て、大学に復帰しましたが、入院していた病院から連絡があり、血液検査の結果、骨に異常があるとのことで、専門の科がある他の病院を紹介してもらいました。

翌年１、２月の忙しい時期が過ぎてから、紹介された病院で詳しい検査を受けた結果、骨のガン（多発性骨髄腫）であることがわかりました。この病気は、白血球中のリンパ球のうち、細胞から分化した形質細胞がガン化して骨髄腫細胞になり、骨髄腫細胞が骨髄で増える病気で、ガン化した骨髄腫細胞は異物を攻撃する能力がない抗体（Mタンパク）を作り続けるそうです。検査結果によると、このMタンパクが異常に多く、そして、Mタンパクは骨の繊維構造を破壊し続けるとのことでした。最初に起きた背骨の骨折による背中の痛みや腰痛はすべて多発性骨髄腫による症状だったわけです。

２月下旬より多発性骨髄腫の治療が始まりました。抗がん剤を用いた化学療法と、レブラミドという抗造血器悪性腫瘍剤や副作用を防止するための薬など、何種類かの錠剤の服用です。化学療法は週２回病院に通って腹部への皮下注射を受けました。また、腰痛に対しても、マッサージと電気治療を週２回程度受けました。これらの治療により、免疫機能はかなり低下していましたので、コロナの感染にはかなり気を付けました。幸いというべきか、令和２年度はコロナ禍の１年目で、新年度当初は授業開始の目途もつかず、また、大学より２ヶ月間の自宅待機命令が出ていましたので、治療に専念できました。

多発性骨髄腫への最も強力と考えられている治療法は造血幹細胞移植だそうですが、これには体調（病期）や年齢などの条件があり、医師と相談して造血幹細胞の自家移植をするという方針になりました。自家移植ですので、自分の体から造血幹細胞を抽出するフェーズと、それをまた体に戻すフェーズがあり、２回の入院が必要です。

１回目の入院は７月下旬から約１ヶ月を要しました。大半をクリーンルームで過ごしました。白血球を増やす薬剤を投入して準備を整えた後、血液から造血幹細胞を採取します。具体的には右腕から血液を採取し、遠心分離機で造血幹細胞だけを分離し、それ以外の成分を左腕に戻します。これを十分な量の造血幹細胞が採取できるまで続けるという方法です。

２回目の入院は９月上旬から10月下旬までの約２ヶ月間で、この時もかなりの期間、クリーンルームで過ごしました。大量の薬物（抗ガン剤）を投与して骨髄腫細胞を死滅させ、冷凍保存されていた自身の造血幹細胞を解凍して血液中に戻すことにより、造血幹細胞が生着し、正常な血液細胞の回復が期待できるということです。

大量の抗ガン剤投与により頭髪が抜け、退院後も様々な副作用によりリハビリにかなりの時間を要しました。現在も再発防止のために抗造血器悪性腫瘍剤の投与と腰痛の治療を続けています。ここ何年か、コースの教職員の皆様や学内外の関係する方々に多大な迷惑をかけてしまいました。特に研究室の学部生や大学院生には十分な指導ができず、大変申し訳なく思っています。都市環境システム学科は創設20年目に都市環境システムコースになり、今年度からは都市工学コースになりました。名称が変更しても長く所属した組織であり愛着があります。今後もますますの発展を願っています。

（すがい　やすお）

デザインコース

■ デザインコースの紹介

材料計画研究室　令和４年度コース長　寺内　文雄

卒業生の皆さま、お変わりございませんでしょうか。本学では新型コロナウィルスの感染と向き合いながらも、この10月からは原則対面で授業を行っていくこととなりました。先日開催しました博士前期課程と後期課程を対象とした候補生評価は、原則対面で実施しました。また９月末の卒業研究中間発表も対面で実施しました。コロナ禍という困難を通して、対面での授業や発表会、研究室でのゼミ活動の重要さや大切さを感じているところです。その一方で、これを機にほとんどの教員や学生がリモートでの授業や会議に習熟したことは、大きな収穫かもしれません。

さて、デザインコースとしての大きなニュースは三つあります。一つ目は、教員の所属が dri（design research institute；デザイン・リサーチ・インスティテュート）となって２年目を迎えたことです。この１年ちょっとの間にdriに少しずつ、他コースから兼任の先生をお迎えしています。多様なご専門をお持ちの先生方と一緒に新しいことができたらと日々考えているところです。

二つ目のニュースは、墨田キャンパスの活用状況についてです。恒例の卒業制作展「意匠展」は、この３月に墨田キャンパスにおいて、建築学コース、都市環境システムコース、園芸学部環境造園学プログラムとの合同で開催しました。加えて墨田キャンパスで行っている学部生を対象とした演習授業や総合プロジェクトも２年目を迎え、徐々に軌道に乗ってきています。また５月には墨田キャンパスにおいて、学部の３年生が中心となって新入生を歓迎する「タテワリ」を催してくれました。このように少しずつではありますが、墨田キャンパスを活用することができはじめています。

三つ目のニュースは、教員スタッフの異動についてです。製品デザイン研究室の林孝一教授とデザイン心理学研究室の日比野治雄教授がこの３月に定年によりご退職されました。研究や学生指導にご尽力いただき、本当にありがとうございました。そして４月から特任教授として、根津孝太先生、三浦秀彦先生、藤本 香先生の３名の先生方をお迎えしました。いずれの先生方も、私どものコースを卒業され、活躍されている方々です。特任教授の先生方には主に墨田キャンパスにおいて、学生の教育と研究に携わっていただいています。具体的には、根津先生にはモビリティデザイン、三浦先生と藤本先生には環境デザインの領域でのご活躍が期待されております。

教員一同、引き続きデザイン研究の発展、社会で活躍できる人材の育成など、更なるコース発展のために尽力して参りますので、倍旧のご厚情を賜りたく、切にお願い申し上げます。

■ 退職教員よりご挨拶

林　孝一（旧・トランスポーテーションデザイン研究室）

2022年３月をもちまして退職いたしました製品デザイン研究室を担当しておりました林です。在職中皆様には多大なるご支援を賜り誠にありがとうございました。約８年という短い間でしたがデザインコースでの役目を無事終えることができました。尚、当研究室は存続し渡邉慎二先生と小野健太先生に引き継いでいただいております。私事で恐縮ですが、奇しくも、丁度40年前の３月本学の大学院工業意匠専攻を修了し企業に入りました。当時は再び同じキャンパスから去ることになるとは夢にも思いませんでした。私の学生時代である1976年から82年は、中東紛争が原因の73年と79年の２回の石油危機で、原油不足や価格高騰が生活を一変させました。また1950年代、60年代の急速な工業化による公害で環境破壊が深刻化するなど、脱石油で環境にやさしい再生可能エネルギーへの転換が叫ばれました。今はと言えば、ITが発達しネットやAIが生活の変革を促す一方、ある国の他国への侵攻に端を発するエネルギー不足やCO2による温暖化が原因の異常気象など相変わらず脱化石燃料と再生可能エネルギーの模索を続けています。この40年私達は一体何をしてきたのか？と愕然とします。しかし、日は昇り若者はまた歩き始めます。その新しく軽やかな歩みに期待を込めてエールを送る次第です。最後に皆様のご発展をお祈りし退職のご挨拶とさせていただきます。

日比野　治雄（旧・デザイン心理学研究室）

本年３月末日付で、私は無事に定年退職となりました（過分にも、４月には“千葉大学名誉教授”の称号もいただくことができました）。思い起こせば、私が千葉大学（教養部心理学研究室）に赴任しましたのが1990年９月１日付ですので、31年７か月の長きにわたりお世話になった訳です。この場をお借りして、これまでに色々な形でお世話をしていただいた事務方の皆様および諸先生に心より御礼を申し上げます。

退職後、私は千葉大亥鼻イノベーションプラザ（独立行政法人中小企業基盤整備機構の施設）にオフィスを構え、大学教育とは異なる立場から私の専門分野である“デザイン心理学”の伝道活動（？）を続けて行くことにしました。なお、技術顧問としてのベンチャー［千葉大学発ベンチャー（株）BB STONEデザイン心理学研究所］の活動も、今まで通り続けています。

最後に少々宣伝を…。私の関わる上記ベンチャーが開発した新罫線（特許取得済）を採用したノート『ほぼ日ノオト』が昨年発売されました［(株）ほぼ日より］。その結果、新罫線の革新性が評価され、国際的に権威のあるデザイン賞を受賞しました［Red Dot Award 2022（プロダクトデザイン部門）およびIAUD国際デザイン賞2021銀賞（グラフィックデザイン部門）］。さらに、先日は日本文具大賞2022優秀賞も受賞しました。機会がありましたら、是非『ほぼ日ノオト』をお使い下さい！

■ 研究室の紹介

2022年度現在、デザインコースには14の研究室があります。研究室の構成は近年大きく変わってきていますので、この紙面をお借りして紹介させていただきます。

モビリティデザイン研究室
（教授　根津孝太（特任）、渡邊慎二（兼任））
モビリティのデザイナーを目指す学生が集まる研究室です。多様化するモビリティのデザインにおいて、社会背景に基づくイノベーティブなコンセプト立案能力と表現力を涵養しています。

システムプラニング研究室
（教授　小野健太、助教　Juan Carlos CHACON QUINTERO）
（国際教養学部兼任　教授　渡邉 誠、准教授　永瀬彩子、Algirdas Paskeviciusk）
システムデザインに関する研究、またデザイン行為をシステムと捉えた研究を行っています。対象は、プロダクト、インタフェース、グラフィック、スペース、社会、プロセスなどで、いずれもシステム的な視点で提案・研究を行うところがユニークな点です。

デザインマネージメント研究室
（教授　渡邉慎二）
プロダクトやサービスのデザインから、新規事業立案や企業ブランドの確立、イノベーションデザインに至るまでを対象としています。デザインに必要な手法やプロセスを研究するとともに、プロジェクトの実践を通して、世界で通用するデザイナーを育成しています。

材料計画研究室
（教授　寺内文雄、准教授　佐藤浩一郎）
種々の材料体験を通して、観測される現象、問題事項を具体的に把握する姿勢を養うとともに、未知の問題に遭遇したときの問題解決能力の育成を目的としています。材料の感覚特性、モデル構築、Generative Designや解の多様性に着目した研究があります。

意匠形態学研究室
（教授　久保光徳、准教授　田内隆利）
実験的制作と論理的考察を通して、人が作る「もの」や「こと」に対して分析的アプローチと直感的アプローチの両面から意味を探り、新たなデザインに展開することを目標としています。形態を有するすべての人工物を対象としています。

コミュニケーションデザイン研究室
（准教授　張 益準）
ブランディング、モーションデザイン、タイポグラフィー、インターフェースデザイン、キャラクターデザイン、イラストレーションなどのグラフィックデザインに必要なアウトプットをデザインしています。企業や自治体などのクライアントと協業するプロセスを重要と考えています。

人間情報科学研究室
（教授　岩永光一、准教授　石橋圭太）
人間と人工物のインタフェースについて、人間の生理特性や心理特性から研究しています。脳を含む全身の血液循環調節や視覚、聴覚、触覚の錯覚のメカニズムなど、一般の生活環境だけでなく特殊環境やVR環境への応用も視野に入れたインタフェースの可能性を追求しています。

心理・行動科学研究室
（准教授　桐谷佳惠）
人の心理行動面について、心理学的アプローチをとっています。感覚知覚、認知、情動感情、学習といった実験心理学に加えて、対人認知や対人コミュニケーションという社会心理学も対象です。ユーザーの潜在的欲求を探り、具現化することもデザイナーの仕事の一つと考えています。

コマーシャルデザイン研究室
（助教　小原康裕）
プロダクトやサービスも含めて商品という視点からデザインを眺めて研究をしています。学部生のみからなる研究室です。研究対象は学生自らが自分で発見、設定することにしています。学生の研究テーマは問わず、幅広い領域を対象としています。

環境デザイン研究室
（教授　佐藤公信、原 寛道、藤本 香（特任）、三浦秀彦（特任）、助教　今泉博子）
人々の暮らしを取り巻く状況をデザインしています。人と人の間や、集団に関わるデザインを対象とし、公共的な取組や、行政や教育、地域に関わることも多くあります。真に求められるデザインを発見することを、実践を通して探求しています。

人間生活工学研究室
（教授　下村義弘）
工業デザインで、日本で最初の人間工学研究室です。人間を科学的に知ることを武器として、産業界、医工学系との連携研究をリードしています。自由な研究テーマと人間の科学が、多くの共同研究と幅広い社会実装を可能にしています。

デザイン文化計画研究室
（教授　植田 憲、助教　青木宏展）
「野に出て生活を学ぶ」をモットーに、各地域にてデザイン実践を展開しています。デザインサーベイ、フィールドワークなどを通じて地域に眠る資源を探り、本当に求められているものを明らかにし、本質をとらえたデザインにアプローチします。

コンテクスチュアルデザイン研究室
（教授　樋口孝之）
社会的・歴史的文脈において人間の諸活動とデザインとの関係性を読み解きながら、居住、仕事、余暇における生活の質の向上をめざし、場の形成や人びとの行動・経験文化のありかたを提案しています。フィールドワークや社会調査、文献研究をもとにデザイン活動を行っています。

サステナブルデザイン研究室
（准教授　ウエダ エジウソン）
ビジネス手法、デザイン戦略、持続可能な教育の原則を取り入れることによって、デザインにおける持続可能な実践の統合を探求し、促進しています。地域および世界の持続可能な社会に貢献し、環境の全体的なパフォーマンスと生活の質の向上につなげていきたいと考えています。

いかがでしたでしょうか。時代に応じるべきところは変わり、普遍的なところは変えないという、学科設立以来のポリシーは今もなお受け継がれています。これからも、同窓生の皆様におかれましては、千葉大学のデザインコースを応援いただければ幸いです。（下村義弘）

機 械 工 学 コ ー ス

■ 機械工学コースの近況報告

コース長　比田井　洋史

令和4年度を迎えました。3月には学部4年生74名が卒業し、うち57名が本学大学院融合理工学府の博士前期課程へ進学しました。また、修士課程の62名が修了し、ほとんどが就職し、社会に羽ばたいていきました。

最近の人手不足もあるかと思いますが、就職で苦労する学生も少なく本学学生が社会に必要とされていると感じております。本学を卒業・修了していった卒業生が、社会で大いに活躍・評価されていることを改めて認識しました。

教職員では、長年にわたり本学にご貢献いただいた浅沼博教授、魯云教授が令和3年度末でご定年となりました。お二人とも引き続きグランドフェローとして在籍していただいております。浅沼先生は工学部収蔵品資料室、魯先生は引き続き留学生のサポートや非常勤講師を担当していただいております。

一方、4月には学部の新1年生が78名、3年次編入が15名、修士の新1年生が64名入学しました。

いい加減飽きてきた話題ではありますが、コロナ対応についてです。本年度第1ターム（4月～5月）までは授業もオンラインが多かったのですが第2ターム（6月～7月）から可能な限り対面授業で行うようになり、キャンパス内の学生の数も増えてきました。コース内での感染者も毎週のように報告されておりますが、濃厚接触者の定義も緩和され、講義などにおいての影響はほとんどない状態になってきました。

しかし、懇親会、飲み会の開催は基本的には許されておりません。学生同士は気の合うメンバーで少人数の飲み会をしているようではありますが、規制されて2年半が経過し、早くも研究室での宴会をどの学生も体験したことがない状態となり文化が失われてしまったように思います。また、飲みなれていない学生が増えましたので、もし、新入社員と飲み会などで同席される場合は、ご配慮いただければと思います。このように徐々に通常に戻りつつある状況です。

今後とも同窓会の会員の皆様にはいろいろな面でお世話になることが多いと存じますが、ご支援賜りますようにお願い申し上げます。

最後になりましたが、同窓会の会員の皆様の今後のご健勝とご活躍を願っております。

■ 教員・学生の受賞（2021年９月～ 2022年８月）

・藤原雅利君（修士2年・山崎研）:『若手優秀講演フェロー賞』、日本機械学会、2021年9月
・木村浩太君（修士2年・武居研）:『Best Paper Award』、Thermofluid XII 2021、2021年11月
・松﨑雄司君（修士2年・大川研）:『SI2021優秀講演賞』、計測自動制御学会システムインテグレーション部門、2021年12月
・秋元優輝君（修士2年・大川研）:『SI2021優秀講演賞』、計測自動制御学会システムインテグレーション部門、2021年12月
・青田篤茂君（修士2年・大川研）:『SI2021優秀講演賞』、計測自動制御学会システムインテグレーション部門、2021年12月
・大毛雄人君（修士1年・大川研）:『SI2021優秀講演賞』、計測自動制御学会システムインテグレーション部門、2021年12月
・小川良磨君（修士2年・武居研）:『NEDO賞』、NEDO TCP2021、2021年12月
・奥村忠晴君（学部4年・山崎研）:『Best Presentation Award』、日本機械学会 関東支部、2022年3月
・今関太一君ほか（修士2年・森田・比田井・松坂研）:『2021年度（第18回）精密工学会論文賞』、精密工学会、2022年3月
・大西皓介君（修士2年・森田・比田井・松坂研）:『2021年度（第18回）精密工学会奨励賞』、精密工学会、2022年3月
・河野美優香君（修士1年・森田・比田井・松坂研）:『優秀講演賞』、千葉県加工技術研究会、2022年3月
・山岸雅人君（修士2年・太田研）:『2021年度衝撃波シンポジウム若手プレゼンテーション賞（Best Presentation Award）』、2021年度衝撃波シンポジウム、2022年3月
・曾昌志君（修士2年・森吉・窪山研）:『AICE Award 成果表彰』、自動車用内燃機関技術研究組合（AICE）、2022年3月
・朝田匠君（学部4年・森吉・窪山研）:『AICE Award 活動表彰』、自動車用内燃機関技術研究組合（AICE）、2022年3月
・小川良磨君（修士2年・武居研）:『三浦賞』、日本機械学会、2022年3月
・小川良磨君（修士2年・武居研）:『融合理工学府長賞』、千葉大学、2022年3月
・小川良磨君（修士2年・武居研）:『学術研究活動賞』、千葉大学、2022年3月
・Sifuna Martin Wekesa君（博士3年・武居研）:『融合理工学府長賞』、千葉大学、2022年3月
・田中光二君（修士2年・武居研）:『三浦賞』、日本機械学会、2022年3月
・日高航輔君（修士2年・劉・中田研）:『日本機械学会若手優秀講演フェロー賞』、日本機械学会、2022年4月
・武居昌宏先生（武居研）:『IMFTF Keynote Speaker』、the 7th International Multiphase Flow Technology Forum (IMFTF) Keynote Meeting、2022年4月
・Yosephus Ardean Kurnianto Prayitno君（特任研究員・武居研）:『IMFTF Keynote Speaker』、the 7th International Multiphase Flow Technology Forum (IMFTF) Keynote Meeting、2022年4月
・大宮裕太君（修士2年・山崎研）:『若手優秀講演フェロー賞』、日本機械学会関東支部、2022年5月
・山崎泰広先生、森川正浩君（修士2年・山崎研）:『論文賞』、日本溶射学会、2022年6月
・小枝大桃君（学部4年・劉・中田研）:『Outstanding Student Poster Presentation』、日本機械学会バイオエンジニアリング部門、2022年6月
・川嶋大介先生（特任助教・武居研）:『Outstanding Poster Presentation』、日本機械学会・第34回バイオエンジニアリング講演会、2022年6月
・瀬川颯君、横溝周君（学部4年・武居研）:『一樹賞』、日本機械学会・第20回流れの夢コンテスト、2022年8月

■ 感謝を込めて

魯　云

昭和63年10月に留学生として日本に来ました。平成5年4月に博士学位をいただき本学旧機械工学科・材料工学研究室に助手として採用され、その後に都市環境システム学科、留学生担当、機械工学コースを経て、令和4年3月に定年退職いたしました。千葉大学で29年間の長きに亘って全学と工学部、特に機械工学コースの先達、同僚、事務方、学生らに大変お世話になりました。また留学期間を含む34年に亘り、指導教授の福永 秀春先生（広島大学名誉教授）をはじめ多くの先生から御指導をいただきました。この場を借り感謝いたします。

大学生と修士課程の頃、鉄鋼材料と熱処理を専攻し、鉄鋼材料の状態図、相変態、組織および機械特性に関する専門に特化しその内容を学び掘り下げながら研究してきました。日本へ留学した際、当時注目される繊維強化複合材料を研究テーマとして選び、複合材料の作製から有限要素法を用いた機械特性のシミュレーションを学び、新しい材料解析手法を習得できました。

千葉大学に着任後、複合材料の研究を続けながらその機能特性に展開しました。21世紀に入り、環境や新エネルギーに関する社会ニーズが高まり、新材料分野からできることがないかと考えたとき、これまでの材料実験から得たヒントをきっかけに機械材料の視点から環境・新エネルギー材料として光触媒と熱電材料に関する研究を始めました。応用化学と応用物理の基礎についてまだ日が浅かったため、多くの労力を費やしながらも、それらの材料開発、性能解析、高性能化および実用化を進めてきました。幸いにも新材料と環境・新エネルギーを融合した研究ができ、企業からも共同開発の声がかけられ実用製品として着手しました。社会のニーズに応じ他分野融合での学際的な研究開発が重要と感じました。

研究室で自由な研究環境を与えていただいた千葉大学名誉教授　広橋 光治先生、また研究室で身近に長年サポートしていただいた浅沼 博先生（千葉大学名誉教授）と糸井 貴臣先生（機械工学コース 教授）に感謝いたします。

教育面では、学生実験や必修科目などを担当しました。卒業生のOBから鉄鋼材料の基礎は、仕事に役に立っている声がありました。学生支援委員会や入試関連の業務に、また留学生担当として工学部および全学で多くの先生から御支援御協力をいただきました。お礼を申し上げます。

これからは留学生担当グランドフェローとして暫く千葉大学で余熱を燃やし、実りあるものとしたいと念願いたしております。

最後にお世話になった皆様の御活躍と御健康を心よりお祈りしています。本当にありがとうございました。

研究室の学生とチームを組んで学長杯駅伝に参加しました。

■ 様々な出会いに感謝!

浅沼　博

お陰様で無事生きて定年を迎えることができ、大変お世話になった皆様方に厚く御礼申し上げます。皆様との充実した協働の証を大量の箱に詰め、改めて人生の重みを感じました。学生時代は大学に就職できるとは夢にも思いませんでしたが、約1年の東大生研（今は更地になってしまったお隣）勤務の後、1985年6月に塀を乗り越えてやって参りました。憧れの就職先で学問の自由を謳歌し過ぎた感はありますが、千葉大教員として様々な劇的出会いに恵まれ、感謝の一言です。

38年近くの教員生活で最強の衝撃は3.11でした。その日以来、研究成果を駆使し、日本沈没級のハザードに襲われても耐えられる絶対安全安心空間等を皆様にお届けしたいと考え、減災・サステナブル学を創成し、（一社）減災サステナブル技術協会も立ち上げるなど、鋭意活動して参りました。さらには、企業やメディアとの壮大な夢物語であるインテリジェンスマニュアル学も創成中でしたが、スポンサー急逝によりペンディングとなりました。幸い、千葉大に災害治療学研究所が立ち上がり、減災サステナブル技術協会メンバーを中心に中身の濃い協働を開始しました。また、グランドフェローとして工学部資料室を担当し、先輩方の財産を守りつつ新展開も模索中です。最近は体力が衰え長生きの自信は無くなりましたが、引続き宜しくお付合い下さい。

楽しみにしていた最終講義は実現しませんでしたので、以下に、もう少々振り返らせて頂きます。

機械系の皆様とは勿論のこと、大学院最先端設備獲得のためのチーム作りから得た学部横断ネットワークに始まり、工学系全般と各種委員会（研究推進（工学版さきがけ、先端研究FD）、教育（震災難局打開）、国際交流等々）、分析センター、VBLプロジェクト、教育プロジェクト、産学連携等々、また外向きには、科研（特定B）研究課題提案・遂行、スマートマテリアル関連研究会と減災・サステナブル学研究会（何れもオフィシャルには日本機械学会にて）等々活動し、また、地の利も生かした各種国際活動や国際会議等主催に学生共々励みました。何と言っても、学生5名の積極参加を得てのウロンゴン大学での国際共同研究は忘れられません。さらに、NASA、Fraunhofer、産総研、物材機構、中部航空宇宙技術センター、ローマ大、ハワイ大、東大、東北大等々の世界各地の研究機関・大学や、鬼怒川ゴム、グレイス始め熱意溢れる企業群、エンジニアリング・リベラルアーツ（日本工学会）、日刊工業、日経、学振、国プロ、県関連、ボーイング社長、財務事務次官、政治家等々、様々な刺激的出会い、活動がありました。

専門分野的には、材料工学分野に関連した革新領域創成（特にスマート機械材料システム関連等およびそれらの革新的防災実現への応用）と独創性涵養、高度国際教育、最先端研究協働、学術・社会貢献、等々に尽力して参りました。研究成果はまだまだ実用化に至らず、引続き奮闘中です。現在は、これまでの発散気味な蓄積を、ほぼ全て減災・サステナブル学／技術の実現に向け展開中です。英国物理学会および日本機械学会からは早々にフェローの称号を頂き、最近は日本工学アカデミー、プラチナ構想ネットワーク会員等としても新規スタート中です。

年度内には、都内会場で退官記念シンポジウムを、リアル（招待講演とカクテルパーティー）・オンラインのハイブリッドでひっそりと開催予定ですので、ご参加頂けます場合には、asanuma@faculty.chiba-u.jp までご連絡下さい。再会を楽しみにしております。個人のHPは未だ無くホームレス状態ですが、稚拙ながら活動の一部を協会HP（https://ssmartace.or.jp/#plx-slider-section）、会社HP（https://resccube.com）でご参照下さい。

医 工 学 コ ー ス

■ メディカルシステム工学科/医工学コースの現状

コース長・学科長　折田　純久

医工学コースは前身の工学部メディカルシステム工学科が平成16年度に開設されてから今年で18年目（平成29年度の工学部改組による総合工学科 医工学コース設立から５年目）を迎えます。昨年度は医工学コースから36名が卒業し、融合理工学府基幹工学専攻医工学コースからは31名の修士課程および４名の博士後期課程修了者に学位が授与されました。また、今年度は41名が学部医工学コースに入学し、３年次には高等専門学校から９名、他大学から１名の計10名が編入学しました。学生担任教員には１年次学生に兪 文偉教授と野村 行弘准教授、２年次に中川 誠司教授と平田 慎之介准教授、３年次に中口 俊哉教授と吉田 憲司准教授（兼 修士１年次）、４年次（兼 修士２年次）には鈴木 昌彦教授と菅 幹生准教授が各々あたり、円滑な学生生活支援に向けた指導を行っています。

医工学コース３年生の特徴的な履修科目である亥鼻IPE（専門職連携教育）では医学部・看護学部・薬学部と連携し、臨床医学の現場体験を通じた学生間の積極的な討議が行われ医薬看護系と工学系の学生間の非常に有意義な異分野交流が認められています。

2020年からの新型コロナ禍は教育・研究環境にも大きな影響を与えていますが、今年度は感染状況に応じて対面講義と昨年度整備されたオンライン授業受講室を活用してのオンライン教育を継続しています。一方で地域貢献として実施されてきた千葉市との連携イベント（千葉市未来の科学者育成プログラム）は、今年は中止となりました。例年であれば生体計測実習と銘打ち磁気共鳴診断装置、超音波診断装置、感覚・知覚・認知機能、ロボット技術を活用する機器の体験などを通じて中高生の医工学体験を促す本イベントは、来年度の無事の開催を教員一同願うところです。

本年11月15日には内外の識者を招聘して行う医工学シンポジウムが医学部附属病院にて実施されます。今回で第20回を迎える本シンポジウムは、感染対策を徹

学部卒業式（令和４年３月23日撮影）

大学院修了式（令和４年３月25日撮影）

底し対面実施を念頭に鋭意準備を進めています。

人事異動では10月１日付でGomez Tames Jose David（ゴメス タメス ホセ デイビット）准教授が名古屋工業大学から、そして岡本尚之助教が千葉大学大学院から着任されました。ゴメス准教授は出身国のコスタリカ工業大学を卒業後に千葉大学大学院工学研究科人工システム科学専攻修士課程および博士課程にて神経への電気刺激に関する電気物理学的モデル作成などの研究テーマで学位を取得され、岡本助教はマイクロCTの活用と精度向上に関わる研究に従事されています。お二人とも本学出身教員として教育・研究活動をますます活性化してくださることと期待しています。

本年度も教職員一同、医工学領域の教育・研究の発展と社会貢献を通じて本学の発展に努めてまいります。つきましては今後とも皆様のより一層のご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

■ 新任教員自己紹介

ゴメス・ホセ 准教授

2022年10月よりフロンティア医工学センター（総合工学科医工学コース）准教授に着任いたしましたゴメス・ホセです。私はコスタリカ出身で、2007年にコスタリカ工業大学電気電子工学科で学位（カナダの CEAB公認プログラム）を取得し、2009年に来日いたしました。その後、千葉大学大学院融合理工学府基幹工学専攻医工学コース博士前期課程へ入学し、2015年に同博士後期課程を修了いたしました。2016年からは千葉大学において日本学術振興会特別研究員として、2017年からは名古屋工業大学において特任助教、准教授として務めてまいりました。専門は神経工学における神経調節で、生体電磁気学と神経発火の複合モデルによる診断や治療などの研究を行っております。具体的には、最適な刺激パラメータを推定するシステムを開発、臨床実験により検証することで、オーダーメイドリハビリテーション法という新規分野を開拓して参りたいと考えております。

医用工学というユニークなプログラムを持つ母校に戻り、教育・研究を行う機会を得たことを大変嬉しく思っております。これまでの経験を活かし、スタッフの方々、学生の皆さんと協力して素晴らしい教育・研究環境を作れるよう努力してまいります。最後に、千葉大学のますますの発展に貢献していきたいと考えておりますので、今後ともご指導、ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

岡本　尚之 助教

2022年10月よりフロンティア医工学センター（総合工学科医工学コース）助教に着任いたしました岡本尚之です。2022年９月に、本学の医工学コースにて学位を取得したばかりであり、このような機会をいただけたことを大変嬉しく、光栄に思っております。私はもともと、メディカルシステム工学科の卒業生（2011年入学）であり、博士前期課程進学後は、羽石秀昭教授の指導のもと、医用画像処理の研究を行い、修了後は民間企業に就職しました。民間企業では、ソフトウェアエンジニアとして、X線CT装置のアプリケーション開発や、深層学習を応用したコンピュータ支援診断の開発に従事しましたが、研究者としての道を志すべく、2019年秋に再びフロンティア医工学センター羽石研究室の門を叩き、現在に至ります。専門は、医用画像処理、画像再構成であり、主にCT像の画質改善やイメージング手法の開発をソフトウェアの観点からアプローチしております。博士論文では、微細な構造情報を取得できるマイクロCT像に対するアーティファクト除去手法を提案しており、今後も継続して三次元画像のイメージングや解析に取り組む所存です。専任教員としては初めての勤務となるため、至らない点も多々あるかと存じますが、医工学領域の発展に全力を傾注して参りたいと思います。今後とも、皆様からのご指導ご鞭撻を賜りますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。

電気電子工学コース

■ 電気電子工学コース便り

コース長　森田　健

今年度電気電子工学コース長を務めております森田です。電気電子工学科が「総合工学科電気電子工学コース」に生まれ変わり６年目に突入しました。この改変によって、他コースからの転入や他コースへの転出が可能になりました。現在は、他コースから転入してきた学生が卒業・大学院への進学を終え、コースの研究活動に貢献してくれています。

コースの近況報告になります。ここ数年では珍しく人事異動に関する報告はありません。しかし、社会が大きく変化する中で、現教職員は異分野を融合した新しい発想での取り組みが期待されています。コースの三つの領域（電気システム工学、電子システム工学、情報通信工学）では、どのように教職員が連携し、研究・教育に貢献できるのか、真剣に議論し模索しています。昨年度から量子デバイス分野だった私が電気電子基礎分野に異動し、量子という観点から電子システム工学領域の基礎分野の強化に努めています。他にも昨年度准教授に昇任した名取賢二先生は、モーションコントロールとパワーエレクトロニクスで、また同じく昨年度助教に昇任した小林宏泰先生は、電気機器・パワーエレクトロニクスを柱としたシステム設計で、電気システム工学領域内での分野を横断した新しい強化に取り組んでいます。

次に、本コース教職員と学生の活躍ぶりの一部をご紹介致します。伊藤智義教授が第16回関東工学教育協会賞「著作賞」を受賞し、早乙女准教授共著の書籍が令和３年度日本磁気学会「出版賞」を受賞しました。また、黒田勝太君（指導教員：佐藤之彦教授、名取賢二准教授）がIPEC 2022でBest Paper Award（First Prize）を、伏見亮祐君（指導教員：中田裕之准教授、大矢浩代助教）が日本大気電気学会で発表賞を受賞しました。さらに、島田一志君（指導教員：安昌俊教授）の論文が論文誌 IEICE Communications Express Top Downloaded Letter Awardを受賞し、赫赫君（指導教員：安昌俊教授）がIEEE VTS Tokyo/Japan Chapter 2021 Young Researcher’s Encouragement Awardを受賞しました。他にも、渡邊峻介君（指導教員：伊藤智義教授、下馬場朋禄教授、角江崇助教）が日本光学会2021年度AI Optics優秀発表賞を、石井美幸君（指導教員：伊藤智義教授、下馬場朋禄教授、角江崇助教）が国際会議3DSA2021においてBest Paper Awardを、安齋亘（指導教員：伊藤智義教授、下馬場朋禄教授、角江崇助教）が第７回OPJ優秀講演賞を受賞しています。

昨年度に続き新型コロナウイルスが猛威を振るっています。それに加え、ウクライナ情勢に関係するエネルギー価格の高騰は、大学運営に影響を与えています。運営費交付金はこれまで以上に大きく削減され、研究教育活動の資金源としてほとんど頼れない状況です。そのため、現教員は科研費の獲得によりいっそう力を入れる必要があり、教員一人ひとりの力が試されています。

教育において最も大事なことは、学生たちの能力を引き出し、自ら学び成長していける環境を用意することだと思っています。コースの取り組みについても触れましたが、学生にとって最も重要な環境は、高い志と情熱を持った教職員です。電気電子工学コースには、高い志と情熱を持った教職員が集まっています。教職員一人ひとりが厳しい状況をプラスにとらえ、目の前の研究教育活動に、誠心誠意努めることで、困難な状況も乗り越えられるはずです。これからも教職員一同が一丸となって励んでまいりますので、卒業生の皆様には、今まで以上に温かいご支援、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

■ 実践的なものづくり教育を目指して

電気電子工学コース助教の小林です。この度、この場をお借りして、当コースの実践的な実習教育である「電気電子工学セミナー」をご紹介させて頂く機会を頂きました。まず、「電気電子工学セミナー」とは、学部２年次の必修科目として開講されている実習科目となります。セミナーの内容としては、**写真１**のような本セミナー用に独自設計されたマイコンボードを各学生が作成し、それを実際に動かしながら、電子工作の基本的なスキルを実践的に習得するプログラムとなっております。

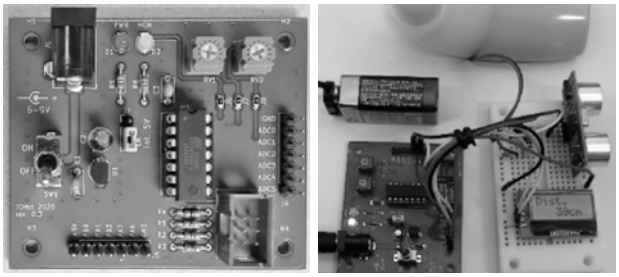


写真１　セミナーで製作するオリジナルマイコンボード（左）とそれを用いた測距センサとモータ制御を組み合わせた製作例

実習プログラムのポイントとしては、下記３点です。

① マイコンボードを作成する過程で、はんだ付けのスキルを習得する
② 作成したボードを動かす過程で、プログラミングに関する知識・スキルを実践的に習得する
③ 作成したマイコンボードを用いて、自らの自由な発想でモノづくりを実践する

上記プログラムを通じて、学生が主体的に考えて問題解決を行うプロセスを身に着けることを目指しております。学部２年次までの多くの学習では、受動的学習がどうしても多くなりがちですが、大学における高等教育で必要とされるのは、自ら課題を発見する創造力・その解決のための合理的・効率的手段を導き出す論理的思考力です。これらの能力を培うのが学部４年次の卒業研究ですが、そこまでに上記のような能動的学習の機会が少ないため、その一連のプロセスを体験してもらうことも、本プログラムの重要な位置づけになり

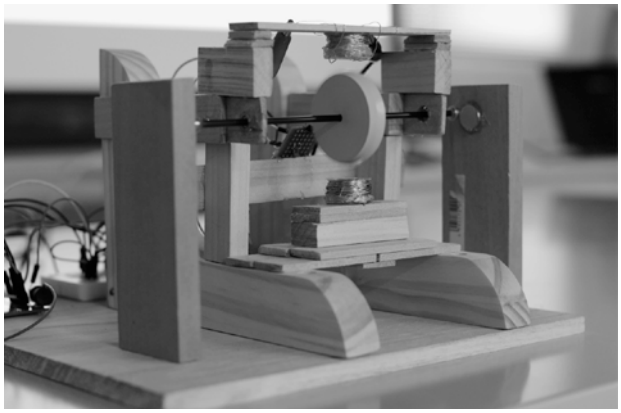


写真２　受講学生が作成したセミナーでの成果物

写真３　電気電子工学セミナーの発表会風景（2019年撮影）

ます。学生を最大限サポートするため、電気電子工学コース教職員全員が本セミナーに関わり、学生の能動的学習を後押しする体制を取っていることも大きな特徴です。学生によって到達度には個人差はありますが、中には**写真２**のような高いクオリティの製作物もあり、学生の主体的学習として一定の効果があると考えています。また、③においては、学生が自分の発想のオリジナリティをアピールする場を設けております**写真３**。この場では、学生によるプレゼンテーション・実演を行ってもらった後、活発な質疑応答を通じて教職員がアドバイス等を行っています。本セミナーを受講した学生からは、今まで経験したことがないため最初は戸惑ったが、セミナーを通じて１つの成果物を創り上げた経験が自信に繋がったとの感想が多く寄せられています。今後も、電気電子工学セミナーを電気電子工学コースの学生の能力向上に寄与する実習として機能させられるよう、本セミナーのコンテンツを継続的に改善して参りたいと考えております。

情 報 工 学 コ ー ス　VI・VII・VII 部会（写真・印刷・画像・情報・情報画像）

■ 情報工学コースの近況

情報工学コース長　大澤　範高

本稿は８月下旬に執筆しておりますが、新型コロナ感染症の影響が引き続きあり、７月末までの情報工学コースの講義は、対面授業も一部では行われましたが、メディア授業も行われました。コロナ禍も３年目となり、オンライン授業やメディア授業教材の改善のための知見も蓄積されてきております。よりしっかりとした連携やコミュニケーションを要する実験や研究室での卒業研究などは、教育や指導の効果を上げるように適切な感染対策を行いながらの対面や対面・オンラインの併用などで実施されております。教員からの教育、指導だけではなく、高い能力をもった学生同士が効果的に影響し合い、学習ができる、大学の「場」としての機能を発揮するためには、新型コロナ感染症の影響がなくなることが望まれます。また、その時には、対面での交流が復活するだけではなく、オンライン授業やメディア授業で利用した情報ツールを対面でも活用することが一般化し、現実と仮想が融合した「場」によって教育・研究のより一層の高度化につながることを期待しております。

情報工学コースの入試では、前期日程、後期日程がある一般選抜のほかに、総合型選抜や先進科学プログラムによる飛び入学といった多様な入試方式を取り入れています。また、総合型選抜では、書類審査を行う第１次選抜において、優れた論理的思考を備えた受験生が出願しやすくなるように、出願に必要となる情報科学やプログラミング能力を示す書類を変更いたしました。様々な入学方式によって能力をもった多様な学生が入学できるように入試の改善を続けております。

令和４年２月に久保尋之先生がイメージング科学コースの准教授として着任され、情報工学コースの教育をご担当いただいております。ご専門はコンピュータグラフィックス、コンピュータビジョンで、画像の生成と解析の両面から研究をされています。グエン・キエン先生が、学際的先端研究及び価値を創造するイノベーション研究の拠点として令和４年４月に設立された国際高等研究基幹（IAAR）の所属となり、准教授に昇任されました。引き続き、工学部情報工学コース、大学院情報科学コースの教育・研究をご担当いただいております。また、環境リモートセンシング研究センター所属で工学部を兼務されていた小槻峻司先生が、IAARの所属となり、教授に昇任されました。情報工学コースの教育をこれまで通りご担当いただいております。

情報工学コースWebサイト（http://www.tj.chiba-u.jp/ie/）がリニューアルされました。学生の受賞やコース紹介、教員・研究紹介、入試情報などの最新情報が掲載されておりますので、ご覧いただければ幸いです。最後になりましたが、今後とも変わらぬご支援をいただきますよう、お願い申し上げます。

■ 大学院イメージング科学コースの近況報告

イメージング科学コース長　堀内　隆彦

2022年２月に、久保尋之先生が准教授として着任されました。コンピュータビジョンやコンピュータグラフィックスを専門とされ、医用画像や映像表現などの幅広い分野で大型のプロジェクトをアクティブに推進されています。卒業研究の配属では、早速情報工学コースの学生の人気を集め、新たな風を吹き込んでくれています。

講義は、引き続きオンライン開講が中心ですが、昨年度と比較して対面型も増えてきました。昨年度から開講したコレクティブデザインに関する講義と演習は、墨田キャンパスのデザイン・リサーチ・インスティテュート（DRi）において対面型で開講され、イメージング科学の学生も建築学、デザイン科学の学生と協力して、プロジェクションマッピングの作品制作等のプロジェクトに参加しました。

研究面では、学内研究推進事業であるリーディング研究育成プログラムの次世代研究インキュベータ「質感・情動イメージングの創成」（代表：津村徳道准教授）の活動で、他大学、他学部との連携プロジェクトを継続しています。これらの研究活動や、本コースの研究室に所属する４年生の卒業研究中間発表会など、研究室の垣根を越えた共同研究や学生交流も、オンラインと対面を組み合わせながら活発に行われています。

国際交流については、学生や教員の派遣や受入れも少しずつ再開しています。画像・情報系の国際学生交流プログラムであるアジア学生ワークショップ（ASW）は、2022年３月に、１週間に渡ってオンラインで実施しました。今年度は、学生の派遣と受入れが計画されています。また、日本学術振興会の研究拠点形成事業B「グローバル感性イメージング科学技術のアジア拠点形成（BAGIS）」（代表：溝上陽子教授）が新規に採択され、アジア各国の大学との教育・研究交流がさらに活発になることが期待されます。加えて、2019年度からノルウェーが主体国となって５ヶ国間で実施している “International Partnership for Excellent Education and Research Project ‘MANER’ – Material Appearance Network for Education and Research（日本側代表：堀内隆彦教授）”（修士課程の学生を対象とした質感に関する教育研究プロジェクト）において、教員や学生の派遣と受入れが計画されており、2020年度からフィンランド、ベルギー、フランス、日本間で実施している “Master of Science Program ‘IMLEX’ – Imaging and Light in Extended Reality”（近未来クロスリアリティ技術を牽引する光イメージング情報学国際修士プログラム）においても、協力校として海外から修士学生を受け入れる予定となっており、依然としてコロナ禍ではあるものの、活発な国際交流が計画されています。

以上のように、まだまだコロナ禍の影響を受けてはおりますが、教員一同、教育・研究の発展に一層努めてお

ります。今後ともご指導、ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。
※コースに関する最新情報は、以下のwebで逐次紹介しています。
コースweb：https://www.tj.chiba-u.jp/imgsci/

■ 新任教員自己紹介

久保　尋之

2022年２月よりイメージング科学コース准教授に着任いたしました、久保尋之と申します。私は2012年に早稲田大学で博士号を取得し、キヤノン株式会社（～2014. 5）、奈良先端科学技術大学院大学 助教（～2020. 3）、東海大学 特任講師（～2022. 1）を経て、このたび、歴史ある千葉大学の一員に加わることが出来たことをたいへん光栄に思います。

私はこれまで、一貫して画像情報処理分野、特にコンピュータグラフィックスとコンピュータビジョンに関する研究に従事して参りました。学生時代に取り組んだ、肌特有の透明感をCGで再現する研究では、曲率に基づく新しいシェーディングモデルを考案してレンダリングの大幅な効率化を実現しました。本研究成果は大手ゲーム制作会社が開発した計５作品で実際に使用されています。また、奈良先端大に在職中には歴史的文化財を多く有する土地柄を活かし、古文書の光学的な質感を記録・再現するためのデジタルファブリケーションの技術を開発しました。さらに、2017年には米国カーネギーメロン大学に客員研究員として１年間滞在し、シーンにおける光伝播の解析と計測技術を発展させて、人の皮下血管をリアルタイムで鮮明に可視化する技術を開発しました。本技術はさまざまな応用が可能であり、特に医用分野への応用が期待されています。その他にも、最近ではアニメ映像作品の制作をサポートするための技術開発に取り組むなど、映像•画像に関する研究に幅広く取り組んでいます。

研究室にはすでに４名の第１期生が配属され、小さいながらも様々な取り組みをはじめております。至らぬ点も多々あると存じますが、全力で千葉大学の発展に尽くしていきたいと考えておりますので、ご指導、ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

■ 井宮淳先生 最終講義

井宮淳先生が2022年３月に定年退職されました。1989年に新しく誕生した情報工学科に、1990年に井宮先生は助教授として着任されました（写真１は1992年に撮影された当時のスタッフの集合写真。井宮先生は２段目の中央左）。以降、いくつかの改組を経ながらも30年以上にわたり千葉大学における情報工学の研究・教育・運営に尽力されてこられました。その間、総合メディア基盤センター（現、統合情報センター）の設置•運営にも尽力され、2011年から10年間にわたり同センター長も務められました。さらに、千葉大学の特色ある入試制度である飛び入学を支援する先進科学センターの設置・運営にも関わっておられました。このように、井宮先生は、新しい組織の立ち上げ期から多くの仕事をされ、千葉大学の発展に多大な貢献をされてこられました。

最終講義は、2022年３月４日に「数理に魅せられた立派な人間でない立派な大学教授の話」と題して開催されました（写真２）。コロナ禍ということもあり、学内の一部の方のみ対面参加、多くの方はオンラインでの参加となりました。「数理に魅せられた」は、井宮先生の「数理」に対する思い入れが入っている題目です。離散幾何学、パターン認識、動画像解析、ロボット工学、医用画像処理など多岐に渡る分野に関して、一貫して数理的に研究に取り組んでおられました。最終講義スライドも、一階述語論理で「数理」的に表現したユニークなものになっていました。題目後半の「立派な人間でない立派な大学教授」は、井宮先生ご自身の発案ですが、元は土屋俊先生（千葉大学名誉教授）の井宮先生評だそうです。この評の妥当性はさておき、「立派な大学教授」は、おそらく大学における正統的な方法や考えを大切にするという意味だろうと思います。

最後に、千葉大学における長年にわたる多大なご貢献に敬意を表すとともに今後ますますのご活躍とご健勝をお祈りいたします。個人的にも、学部４年生の卒業研究から現在まで25年以上にわたってご指導をいただきました。「立派な大学教授」は遥か彼方ですが、井宮先生にいただいた助言を思い出しつつ精進したいと思います。

（川本　一彦）

写真１ 情報工学科スタッフ集合写真（1992年撮影）

写真２ 最終講義の様子

物 質 科 学 コ ー ス

■ 物質科学コース便り

コース長　青木　伸之

新型コロナウィルスの発生から３年が経ち、ようやく我々としてもどのように恐れ、どのように対応していくべきかがわかってきたところですが、まだ安心できない状況が続いております。それでも今年度は「できる限り実地で学生実験を受けさせたい」との思いから、教職員としてもできる限りの対応を行い、２年生は全員が、３年生は交代で半数ずつが実験室に来て学生実験を行うようにしてきました。大学本部からは、この秋からは原則として対面授業に戻すようにとの連絡も来ております。しかし、この３年間学生たちは、入学当初からコロナでサークル活動も制限され、コース内で友達を作ることもなかなか叶わず、大学本来の生活を送ることができませんでした。そこで、教員の有志が中心となって、昨年度より学生実験の合間を縫って遠足を企画しました。「大学生が遠足？」とお感じかも知れませんが、コロナ禍で外出もままならなかった彼らにとって、毎日千葉大学に来てはいても、千葉市内を自由に散策することもできずに過ごしてきたことを想像しますと、如何に不憫な状況であったかお分かりいただけると思います。彼らは入学してから一度もクラスメイトと一堂に会することなく過ごしてきたわけですが、今回の遠足では少人数ずつに分かれて、ゴールであった千葉ポートタワーを目指して、歩いていきました。途中のチェックポイントで待機していた教員によりますと、多くの学生がとても生き生きとした表情で遠足を楽しんでいたとのことでした（２年生)。これを機会に、学生同士が知り合う切っ掛けとなり、少しずつ絆ができてきているように思います。本年度はその経験を引き継ぎ、各学年の学年担任を中心に、千葉市科学館（１年生）や千葉マリンスタジアム（２年生）をゴールとした遠足や、ＯＢ講演会とボーリングを組み合わせた懇親会（３年生）を企画するなど、やっと学生たちに大学生らしい笑顔が戻ってきたように感じています。

また、昨年度には物質科学コースが発足してからは初めての「画像産業汎論（2023年度からは物質科学産業汎論に名称変更)」の授業が行なわれました。こちらは前身の画像科学科やナノサイエンス学科を卒業して産業界で活躍しているＯＢ・ＯＧを中心にゲストに招き、オムニバス形式でご自身の体験や後輩たちに伝えたいことなどをお話しいただく専門科目となります。第１回目の昨年度は14名のゲストをお招きし、担当いただきました。選択科目にも関わらず、約30名の学生が履修するなど、学生たちにとっても先輩たちの生の声を聞いて自らの将来を想像するチャンスとなることから、関心の高さが伺えました。

昨年12月には、2020年に急逝された坂東弘之先生の後任となる柯夢南先生が助教（テニュアトラック）として着任されました。柯先生の専門は半導体工学で、次世代のVLSIでの利用を踏まえた半導体素子、とくに原子層堆積法によるhigh-k絶縁膜の成長や金属－酸化物－半導体界面特性評価の研究をされています。また、本年４月には、久下謙一先生の後任として、津田哲哉先生が教授として着任されました。津田先生はイオン液体が専門で、新奇のイオン液体の開発とそれを用いた環境対応型のエネルギー材料、蓄電デバイスの開発をされています。一方、本年４月には、助教の田中有弥先生（先進科学センター本務）が、群馬大学大学院理工学府 知能機械創製部門に准教授として異動されました。田中先生は、有機半導体の特性を生かした振動発電素子（エレクトレット）の研究で科学技術振興機構・さきがけの研究者としても活躍され、物質科学コースの若手教員のホープとして期待される人材でありましたが、ご栄転ということで、この３月に教職員皆で門出を祝して送り出しました。早速、群馬大学でのご活躍のお知らせも聞こえてきております。また、千葉大学でも客員准教授をお引き受けいただいておりまして、引き続き千葉大学での教育研究に携わっていただくことになっております。

１年生の遠足の様子。千葉市科学館にて。

最後に、昨年度物質科学コースの研究を紹介するYouTube動画がアップロードされました。化学系のPart １と物理系のPart ２がありますので、ご覧いただけますと幸いです。

千葉大学工学部総合工学科 物質科学コースPart 1
https://www.youtube.com/watch?v=4OgkeXgvVbQ
千葉大学工学部総合工学科 物質科学コースPart 2
https://www.youtube.com/watch?v=sSNXNAQpAy8
物質科学コースのWEBページ：
https://www.tp.chiba-u.jp/ms/

■ 新任教員自己紹介

教授　津田　哲哉

2022年４月１日付で物質科学コースの教授として着任いたしました。九州工業大学（工学士、工学修士）、京都大学（博士（エネルギー科学））で学位を取得した後､渡米し、帰国後、大阪大学 大学院工学研究科テニュアトラック助教､同 准教授(テニュア取得）を経て現在に至ります。私の専門分野はイオン液体（100 ℃以下で取り扱うことのできる溶融塩（液体塩））を反応媒体に利用した電気化学・材料科学です。最近では、アルミニウム二次電池、低環境負荷型アルミニウム精錬、機能性電極触媒、電池反応のその場分析などに関する研究を行っています（千葉大学にはイオン液体・溶融塩の分野を牽引してこられた著名な先生方が多く、身の引き締まる思いでいます。）。私はイオン液体と卒業研究以来の付き合いで、2001年からの７年間に及ぶ米国滞在時には、この分野の世界的研究者であるチャールズ ハッシー教授（ミシシッピ大学)、シェン ダイ博士（米国オークリッジ国立研究所・テネシー大学）から様々なことを学び、大きな影響を受けました。その経験を十分に活かして、イオン液体・溶融塩研究に強い千葉大学を世界にアピールできるよう、研究はもちろんのこと、後に続く優秀な人材の教育・育成にも情熱を持って取り組む所存でいますので、ご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

助教　柯　夢南

2021年12月に着任しました物質科学コースの柯夢南と申します。2012年度中国広州の華南理工大学電子工学科を卒業後、2013年に東京大学大学院工学系研究科電気系工学専攻修士課程に入学し、2015年に修士号、2018年に博士号を取得しました。その後、東京理科大学工学部電気工学科で３年間助教を務め、現在千葉大学物質科学コース青木・柯研究室の研究教育活動に日々努力しています。

柯は2013年から今後の半導体集積回路の進化を可能にする新チャネル材料や新構造トランジスタなどを勉学・研究を行いました。極薄のゲート絶縁膜かつ低欠陥のMOS界面を実現可能な新しいGeゲートスタック形成方法として、ALD法による種々の高誘電体薄膜を用いた新規のMOS界面プロセスを提案・実証すると共に、遅い準位の物理的起源の解明や新しい評価技術の提案・確立などの研究成果を挙げてきました。助教として千葉大学に着任後、SiやGeなどのMOS界面、MOSFETの研究経験をうまく活用し、TMDCを用いるMOS界面、FETの分野に最先端な研究を挑戦しています。

山不厭高、海不厭深。自慢せず、人生に挑戦し続ける、私の座右の銘です。私の夢は、将来優秀な教授になりたい。傑出した研究成果を貢献し、社会のためにより多くの人材が育つことを望んでいます。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

■ 転任のご挨拶

田中　有弥

2021年度末で学生として９年間、教員になって６年間お世話になった千葉大学を退職し、群馬大学大学院理工学府知能機械創製部門に准教授として赴任いたしました。会社員時代を含め、18年間千葉で過ごしました。その間石井久夫先生をはじめ、非常に多くの先生方、事務の方々に大変お世話になるとともに、教育や研究はもちろん、高大連携事業や同窓会でのお仕事なども含めて様々な経験をさせていただきました。本当にありがとうございました。

2004年に入学した学科は工学部の電子機械工学科でした。２年生になる際にコースを決めればよかったので、やりたいことがはっきりしていなかった私にとっては素晴らしい学科でした。結局電気電子コースに進学し、その後石井先生の下で有機エレクトロニクスに関する研究に携わるようになりました。2016年に教員として先進科学センターに着任した後は、ナノサイエンス学科（その後物質科学コース）を兼務させていただきました。少し前から振動発電素子関係の研究を行うようにもなりまして、それがきっかけで今では機械系の所属となりました。現在の学部の所属は工学部電子･機械類です。ぐるっと一周回って元に戻ってきた気がします。

きっと機械工学の勉強をしなさいということなのでしょう。初心に帰ってしっかりと学び、千葉大学での経験を活かしながら新しい方向に研究を発展させていきたいと考えています。同窓会関連のお仕事でも多くの先輩方にお世話になりましたが、紙面の都合上この辺りで筆を擱かせていただきます。これからも千葉大学にお邪魔することもあるかと思いますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

共生応用化学コース

■ コース近況報告

共生応用化学コース　学部コース長　星　永宏

共生応用化学コースおよび共生応用化学科、これらの前身である物質工学科、応用化学科、機能材料工学科、工業化学科、合成化学科の卒業生の皆様、いかがお過ごしでしょうか。日頃より第Ⅴ部会および同窓会に対してご支援を賜り、深く感謝いたします。

共生応用化学コース教員の人事異動に関しては、後述のように笹沼裕二先生（環境調和高分子材料研究室）が2022年３月31日付で定年退職されました。笹沼先生はお一人で研究室を運営されていたため、環境調和高分子材料研究室は笹沼先生の退職とともに幕を閉じました。一方、新たに共生応用化学コースに加わった先生がおられます。2022年４月１日付で、唐津孝教授と谷口竜王教授が在籍するエネルギー変換材料研究室に東京工業大学から青木大輔先生が准教授として赴任されました。また、同日付で、都市環境システムコースの松野泰也教授と吉村影大助教の主担当コースが、共生応用化学コースになりました。お二人は環境マネジメント工学研究室を運営され、共生応用化学コースの学生の教育をされます。今後は毎年教授の定年退職が続き、2022年度末に退職される関実先生を含めて、2026年度末までの４年間に兼担も含めて８名の教授が退職します。コースの教員の顔ぶれは大きく変わっていきます。

現在工学部の再開発が順次進んでおり、今年度に新講義棟を建設して講義室を集約します。卒業生の皆様が慣れ親しんだ共生応用化学コースの研究棟にも今後改修が行われる可能性があります。ただし、再開発が先行している他の国立大学の例をみると、改修後の面積は現在の１～２割減になると予想されます。現在の建物面積は高度成長期・ベビーブーム期の学生数と教員数に基づいて決められており、当時と比べて学生数・教員数が減っていることが面積減の根拠と思われます。現在でも狭くて困っている研究室面積がこれ以上減っては立ち行かないので、研究室面積が減らないよう立案時に工夫する必要があります。

新型コロナのため、2020年度の講義と修論発表会・卒研発表会は全てオンラインでした。2021年度の講義は受講者数を講義室定員の半分に絞って対面で実施されましたが、修論発表会・卒研発表会はオンラインとなりました。2022年度の前期の講義は定員を半分に絞っての原則対面でしたが、後期では、マスク着用などの感染対策を徹底した上で、教室の収容定員100％での実施が認められます。コース内でも毎週のように感染者と濃厚接触者が出ていますが、大部分の教職員・学生が３回目のワクチン接種を終えて重症化リスクが減っており、少しずつ元のキャンパスライフに戻りつつあります。

国立大学の研究環境は年々厳しさを増しています。研究室に配分される運営交付金（校費）は、研究に必要な設備備品と消耗品の購入だけでなく、汎用性のあるパソコンや什器の購入、研究室の営繕にも使用できます。ところが、2004年に国立大学が独立行政法人化されて以降、大学への運営交付金は効率化のために毎年１％削減され、それに応じて校費も年々減少を続けています。当研究室を例に取ると、独立行政法人化前の2000年度の校費の配分額を100にした場合、10年前の2012年度に77に減少、５年前の2017年度には38に落ち込みました。その後、2021年度までは34の水準を何とか維持していましたが、2022年度になって電気代の高騰と劣化防止費の積み増しを理由に16に減少し危機的な状況になっています。競争的資金の用途は厳密に規定されており、汎用品や研究室の営繕には使用できません。競争的資金を獲得して高額な装置を購入しても、必要な電源工事や実験台の購入ができず、装置を使用できない事態になりかねません。一刻も早く大学への運営交付金の削減を止めないと、競争的資金を獲得しても研究ができなくなると危惧しています。

校費だけでは研究に必要な設備備品や消耗品の購入ができない状況ですので、教員は競争的資金の獲得に時間と労力を使い、懸命に研究を進めています。2021年９月～ 2022年７月の間の共生応用化学コースの受賞数は、後述のように教員３件、学生50件です。逆風に負けず、全員が教育と研究に全力を注いでいます。今後とも変わらぬご支援をお願い申し上げます。

■ 教員／学生の受賞（2020.10 ～）

・教員の受賞

矢貝 史樹教授（分子集合体化学研究室）：日本化学会第39回学術賞／原 孝佳准教授（触媒化学研究室）：令和３年度日本イオン交換学会学術賞／岸川 圭希教授（ソフト材料化学研究室）：日本液晶学会業績賞

・学生の受賞（口頭発表）

第59回アイソトープ放射線研究発表会：若手優秀講演 松野 明未さん（計測化学研究室）／第21回高分子ミクロスフェア討論会：優秀発表賞 藤田 勇太さん（ソフト材料化学研究室）／第31回日本MRS年次大会：奨励賞 藤田 勇太さん（ソフト材料化学研究室）／ The 2021 International Chemical Congress of Pacific Basin Societies（Pacifichem 2021）：2021 Student Research Competition winners玉木 健太さん（分子集合体化学研究室）／第48回炭素材料学会年会：優秀発表賞 久野 一心さん（資源反応工学研究室）／ The 26th Symposium of Young Asian Biological Engineers' Community：YABEC 2021：SCEJ Award（student presentation award）高木 真惟さん（バイオプロセス化学研究室）／基礎有機化学会　若手オンラインシンポジウム（第１回）：優秀講演賞 玉木 健太さん（分子集合体化学研究室）／第35回日本イオン交換研究発表会：学生口頭発表賞 伊熊 哲平さん（触媒化学研究室）／粉体工学会第56回夏期シンポジウム：学生賞 逸見 るなさん（バイオプロセス化学研究室）／化学工学会52回秋季大会：粒子・流体プロセス部会シンポジウム賞（プレゼンテーション賞 佐藤 丈流さん（バイオプロセス化学研究室）／日本セラミックス協会 第34回 秋季シンポジウム：発表奨励賞 伊藤 壮生さん（セラミックス化学研究室）、松本 博惠さん（セラミックス化学研究室）／ GLASS MEETING 2020：Bronze prize 有賀 俊輔さん（極限環境材料化学研究室）

・学生の受賞（ポスター発表）

日本鉄鋼協会第184回春季講演大会:努力賞 松野 明未さん（計測化学研究室）／化学工学会 第87年会：優秀発表賞 金子 直矢さん（エネルギー変換材料化学研究室）、籾山 貫太さん（バイオプロセス化学研究室）／第39回高分子学会千葉地域活動若手セミナー：最優秀ポスター賞 小見山 夏緒さん（ソフト材料化学研究室）、優秀ポスター賞 吉岡 大輝さん（ソフト材料化学研究室）、磯村 聡次郎さん（ソフト材料化学研究室）、奨励ポスター賞 浦瀬 舞さん（ソフト材料化学研究室）、橘 京香さん（ソフト材料化学研究室）／第16回酸化グラフェン研究会：優秀ポスター賞 川合 崚平さん（資源反応工学研究室）、佐藤 有紗さん（資源反応工学研究室）／シンポジウム モレキュラー キラリティー 2021：ポスター発表優秀賞（Chemistry Letters Young Researcher Award）中村 拓海さん（精密有機化学研究室）／第11回CSJ化学フェスタ2021：最優秀ポスター発表賞（CSJ化学フェスタ賞）有馬 大就さん（分子集合体化学研究室）、優秀ポスター発表賞 浦瀬 舞さん（ソフト材料化学研究室）、宮﨑 紀佳さん（精密有機化学研究室）、金子 直矢さん（エネルギー変換材料化学研究室）、相澤 匠さん（分子集合体化学研究室）、磯辺 篤さん（分子集合体化学研究室）、髙橋 渉さん（分子集合体化学研究室）、川浦 麻衣花さん（分子集合体化学研究室）、土田 亮真さん（分子集合体化学研究室）／ Optics of Liquid Crystals 2021（OLC2021）: Shimakutuba Poster Award 秋山 吾篤さん（ソフト材料化学研究室）／第29回有機結晶シンポジウム：優秀ポスター賞 中村 拓海さん（精密有機化学研究室）／第31回基礎有機化学討論会:学生ポスター賞 相澤 匠さん（分子集合体化学研究室）、有馬 大就さん（分子集合体化学研究室）／日本セラミックス協会 第37回 関東支部研究発表会：最優秀賞 氏家 和也さん（セラミックス化学研究室）、奨励賞 松本 博惠さん（セラミックス化学研究室）／ 2021年日本液晶学会討論会: 虹彩賞 須田 雄仁さん（ソフト材料化学研究室）、若葉賞 小林 拓矢さん（ソフト材料化学研究室）／第72回コロイドおよび界面化学討論会：ポスター賞 吉岡 大輝さん（ソフト材料化学研究室）／ 2021年光化学討論会：優秀学生発表賞 有馬 大就さん（分子集合体化学研究室）／第24回ヨウ素学会シンポジウム: 優秀ポスター賞 藤村 竜平さん（精密有機化学研究室）／第70回高分子討論会：優秀ポスター賞 佐藤 裕太さん（分子集合体化学研究室）、須田 奈月さん（分子集合体化学研究室）、栃堀 芽生さん（分子集合体化学研究室）／日本セラミックス協会 第34回 秋季シンポジウム：ポスター奨励賞 磯脇 鈴奈さん（セラミックス化学研究室）／日本鉄鋼協会第182回秋季講演大会：努力賞 勅使河原 広貴さん（計測化学研究室）／ PACRIM14：Bronze prize 筥崎 友士さん（極限環境材料化学研究室）

（河合　繁子　記）

■ 共生応用化学コース　就職状況報告

令和３年度（2022年３月）学部卒業生・博士前期課程修了生の就職活動は新型コロナウィルスの影響から、対面形式ではなくオンラインによる活動が多く行われました。学内にてOB・OGの皆様に開催いただいております仕事セミナーについても、対面でお話を伺う機会が減ったことは残念なところです。そうした中でも従来同様の内々定率となっています。卒業生については、78名が本学大学院、７名が他大学大学院に進学し、10名が就職しました。就職先は、化学を含む製造業（３名）、情報通信（４名）、物流（１名）、銀行（１名）、教員（１名）でした。修了生については、２名が本学大学院博士後期課程に進学し、67名が就職しました。就職先は、公務員（１名）、財団（１名）のほかに民間企業として化学（54名）、機械・電気（４名）、自動車（１名）、情報通信（６名）でした。複数名を採用いただいた企業も多く、卒業生・修了生の皆様のご活躍が当コース学生へ好印象を与え、多くの採用につながっているものと思います。

令和４年度（2023年３月）卒業生・修了生についても新型コロナウィルスの影響を受け、仕事セミナーや就職活動の多くがオンライン形式となりました。オンライン化への対応として、後援会からの補助金を利用してWeb会議用のブースを購入させていただきました。この場を借りて御礼申し上げます。就職希望の多くの学生は内々定を取得し、進路が確定しています。昨今の就職活動をみていると、インターンシップとの関連を意識している学生が見受けられますが、進路先企業のインターンシップに参加した学生は３割弱であり、学生へのアンケートではインターンシップ参加は就職活動の上で重要と思ってる学生は半数程度でした。教員の側からすると、多くの学生が研究に邁進する時期と重なることから、単なる紹介の場ではなく、仕事を体験する場として機能するインターンシップを願うところです。仕事セミナーのオンライン化についてもアンケートを取ったところ、オンライン開催の参加のしやすさは８割以上に上りましたが、関心の高い企業の仕事セミナーについては対面での実施を希望する意見が多くなりました。学生も、質問がしやすい対面方法を望んでいるようです。引き続き、仕事セミナーの開催について積極的にお考えいただけますと幸いです。ご要望などございましたら、遠慮なく就職担当にお知らせください。教育・研究活動と同様に、教職員一丸となって学生の就職活動を引き続き支援していきたいと思いますので、卒業生・修了生の皆様からのご協力の程、よろしくお願い申し上げます。

（松本　祥治　記）

■ 坂本昌巳先生最終講義

坂本昌巳先生は、昭和54年３月に筑波大学第一学群自然学類を卒業後、同大学院化学研究科博士課程へ進学されました。昭和58年11月に同研究科を中退され、12月に筑波大学文部技官になられました。昭和60年10月に千葉大学工学部の助手として採用され、平成６年には同大学院自然科学研究科の助教授となられています。その間、昭和62年１月に理学博士の学位を筑波大学から取得され、昭和62年10月～63年10月までミシガン州立大学において博士研究員として勤務されました。その後、平成15年10月に千葉大学大学院自然科学研究科の教授となられ、改組により平成19年４月に同工学研究科教授、平成29年４月には同工学研究院教授への配置転換を経まして、令和４年３月31日に定年ご退職となられました。

先生は不斉合成に関する研究にご尽力され、特に結晶のキラリティーに着目することで絶対不斉合成という、外的不斉源を用いない新しい不斉合成研究分野を開拓されました。先生の開発された絶対不斉合成手法は、対称性の破れといった生命の起源を解明する研究として注目され、関連論文は世界中で高く評価されています。これまで研究されてきた結果、著書12冊、特許17件、学術論文300報以上に代表される多数の研究業績を挙げられ、それらが評価され平成26年に

Molecular Chirality Award 2014を受賞されています。

先生は教育にもご尽力なされ、「光化学」の授業では実際に試験管内で起こる化学反応を行ってみせるなど、学生の理解度向上に工夫をされていました。さらに、大学教育の改革にも積極的でおられ、平成24年には先生が中心となって提案された「高度ビジュアル化による化学実験教育」が文部科学省の「質の高い大学教育推進プログラム」に採択され、文部科学省 工学教育賞と文部科学大臣表彰を受賞されました。

先生は大学や学会の運営活動においてもご活躍され、学内では平成20年度と27年度に共生応用化学科の学科長、平成21年度と28年度には工学研究科共生応用化学専攻の専攻長、平成29年度に大学院工学研究院の副研究院長と工学部の副学部長、平成30年４月から令和２年３月まで千葉大学評議員、平成24年度に千葉大学分析センターのセンター長を歴任されました。学外においては、平成18年４月から20年３月まで光化学協会の理事、平成20年４月から22年３月まで有機合成化学協会の協会誌編集委員、平成25年４月から27年３月まで日本化学会の有機結晶部会において部会長を務められ、組織の運営に貢献されました。

最終講義、並びに退職祝賀会は３月20日に行われ、残念ながらコロナ禍の影響でオンライン上での実施となりました。当日は、先生が行われてきた研究や教育における成功や失敗、また懐かしい写真や思い出話が披露され、150人を超える卒業生が参加した盛大な会となりました。これもひとえに先生のお人柄によるものだと思います。退職後は自転車に乗りながら旅行をして写真を撮りたいとのことでしたので、クロスバイク（スポーツ自転車）を退職祝賀会にて記念品として差し上げました。今後もご健康に留意され、ご活躍されることを祈念しております。

（三野　孝・吉田　泰志　記）

■ 定年退職のご挨拶

笹沼　裕二

令和４年３月末日に千葉大学定年退職の辞令をいただきました。これまで教職員・卒業生の皆様に大変お世話になりました。心からお礼申し上げます。

東京工業大学修士課程を1982年３月に修了し、４月に東レ株式会社に入社し、７月から㈱東レリサーチセンターに出向しました。そこでX線回折・散乱法を用いた材料の構造解析に従事しました。1988年８月に母校の研究室に帰り、安部明廣先生のもとで助手として４年間液晶の構造解析に携わりながら、東レでの研究をまとめ1992年に博士（工学）の学位を賜りました。1993年から４年間通産省工業技術院物質工学工業技術研究所に勤務し、小角X線散乱法のシステム開発と高分子の構造物性の研究に従事しました。この間、1996年から１年間エネルギー技術研究調整官を兼務し、研究所と霞が関の調整と研究所内の管理業務も担当しました。これは国の行政機構を知るとても良い経験でした。1997年３月に千葉大学に移り定年まで25年１か月の長きに渡り勤めさせていただきました。したがって40年間、国立総合大学、国立理系単科大学、国立研究所、民間企業、さらに私立大学での非常勤講師も含めますと、産官学すべての研究世界を経験しました。有難いことと感謝しています。

現在（2022年８月）は、主に千葉大学での教育研究を著すことに努めています。生憎と退職前の身辺整理で執筆が遅れましたが、2023年４月にJohn Wiley & Sons社からConformational Analysis of Polymers：Methods and Techniques for Structure-Property Relationships and Molecular Designと題して出版される運びとなりました。千葉大学で担当していた「高分子物性」と「高分子物理化学」の授業内容に加筆したものを基礎とし、学生諸君との共同研究を応用として紹介するものになります。高価なため卒業生の皆様に差し上げるとも買ってくださいとも申せませんが、千葉大学での教育研究が改めて形になり世界に向けて発信できることを共にお喜びいただけましたら幸いに存じます。また、私事としては、自宅が築27年となり幾分朽ちてきましたので、リフォームすべく不動産会社と打ち合わせています。９月中旬に施工開始となります。これら一連のことが終わりましたら、新しい勉強を始めようと考えています。

同窓会会員の皆様のご健康とご多幸を心からお祈りしています。素敵な25年と１か月に改めて感謝いたします。

■ 新任教員紹介

准教授　青木　大輔

2022年度４月から共生応用化学コースに着任した青木大輔です。2008年山形大学大学院理工学研究科 生体センシング機能工学専攻で修士号を取得後、民間企業に３年間お世話になりました。2011年４月に東京工業大学大学院 理工学研究科 有機・高分子物質専攻 博士後期課程に入学し、2014年３月に学位を取得した後、2017年３月まで東京工業大学 高田十志和先生の研究室で特任助教、2017年４月から2021年３月まで同大 大塚英幸教授の研究室で助教を務めておりました。今年４月からはエネルギー変換材料化学研究室の准教授として研究、教育、大学運営に携わる機会をいただきました。

私の専門は、プラスチック（高分子）でございまして、高分子のトポロジー制御に関する研究をこれまで進めてまいりました。ヒモ状の高分子から、分岐している高分子、さらには環状の高分子を合成し、そのトポロジーを自在に変化させることで機能材料として利用する研究です。高分子と言えば私たちの生活から切っても切り離せない便利なものですが、マイクロプラスチックによる海洋汚染やプラスチックのリサイクル問題といったいくつかの課題も取り上げられています。千葉大学では100年後の未来を見据えた高分子材料開発に取り組んでいきます。例えば今取り組んでいる研究では、使用後のプラスチックを植物肥料に変換するリサイクルシステムの実現を目指しています。使用後の廃棄プラスチックを肥料として有効活用できれば効率的に資源循環できますし、廃棄プラスチックから合成した肥料は世界規模の人口増加に伴う食糧危機を救うかもしれません。

「空気からパンを作る」、空気中の窒素を水素と直接反応させて肥料の原料であるアンモニアを生産するハーバー・ボッシュ法の発明はこのように形容され、19世紀のヨーロッパの食糧危機を救いましたが、私は「プラスチックからパンを作る」、未来少年コナンに出てくるような夢の技術開発を目指します。

さて私の研究のCMはさておき、共生応用化学コースの学生が社会で活躍する手助けができるよう、全力で取り組む所存です。至らぬ点もあるかと思いますが、皆様ご指導ご鞭撻の程どうぞよろしくお願い致します。

凡　　展

1990年以来、2019年には30回を重ね、出品者も近年は40 ～ 50名の方に参加いただいています。コロナ禍のため残念ながら2020年から２年続けて中止せざるを得ませんでしたが、今年は３年ぶりに10月２～８日の７日間、東京交通会館（東京・有楽町）にて開催しました。

凡展には毎回、絵画や写真、CG、書、立体造形など、幅広いジャンルの作品が寄せられ、それがこのグループ展の大きな特徴です。また、一般来場者とともに、出品者の同窓生や先輩・後輩たちの交流の場ともなっています。再開にあたってはその和やかさを大切にする本展の特色を損なうことの無いよう、運営側としてできうる限りのコロナ対策を講じ、来場者の皆さまにもご協力をお願いしながら、何とか無事に最終日を迎えることができました。

今年３月には凡展代表として長年にわたり本展を支えていただいた森崇先生の急逝という、予期せぬ事態もありましたが、先生の遺志を受け継ぎ、今後も本展の継続に努めてまいります。

その思いも込め、今回は会場の一角に森崇先生の作品展示のコーナーも設けました。

また、凡展では随時、新メンバーを募集しています。開催状況は工学部同窓会のホームページでもご紹介していきますので、ぜひ一度ご来場のうえ会場の雰囲気を感じていただき、さまざまなジャンルの出品をお待ちしております。

本展開催にあたっては、これまで大学関係者や同窓生の皆さまのご支援をいただき、心より感謝しております。今後とも引き続きましてご支援のほど、よろしくお願いいたします。

第31回凡展（2022年）の会場の様子（右側 森崇先生特別展示コーナー）

凡展代表：水野　晃一（意匠９回卒）
事 務 局：蔦谷　邦夫（意匠25回卒）
〒108-0073　東京都港区三田4-3-15
電　話：03-3453-2567　メール：tsuta-3@nifty.com
千葉大学工学同窓会 凡展　HP：https://chiba-kougaku-dosokai.jp/?page_id=927

松　芸　展

■ 第14回　松芸展のお知らせ

来年2023年４月16日～ 22日間、第14回松芸展を有楽町・東京交通会館１階ギャラリーパールルームで開催いたします。当会は千葉大建築学科同窓生なら何方でも参加できますので、奮って参加ください。作品は平面作品（油彩、水彩、アクリル、日本画、版画）、立体作品（陶芸、彫刻）を対象としております。今年2022年の参加者は代表の安生満はじめ９名、51点の出展（一人５点～７点、６号～ 20号）がありました。同窓の方、絵画愛好の方のご来場をお待ちしております。今年３月21日に私共松芸展の顧問として第１回松芸展から長くご指導頂いた森崇先生がお亡くなりになりました、紙面をお借りし謹んでお悔やみ申し上げます。

松芸展代表　安生　　満（1954年卒）
同 事 務 局　田口　裕一（1962年卒）
〒202-0022　西東京市柳沢3-4-2-203
電話：080-2042-4628
Mail：geelbec@gmail.com

令和３年度事業報告

令和３年４月１日から令和４年３月31日までに実施した主な事業について、以下の通り報告致します。

１．工学同窓会報の編集・発行

令和３年11月16日に第48号（全32ページ、24,167部）を会員に発送しました。会報には、工学部創立100周年記念事業の趣意書ならびにご寄附のお願いも掲載しました。

２．令和３年度工学同窓会 総会および懇親会

令和３年５月22日に松韻会館１階第１会議室にて（ネット併用）総会を開催しました。総会では、まず令和２年度事業報告・決算報告・会計監査報告があり、原案通り承認されました。次いで、規定により橋本会長が議長に指名されて令和３年度事業計画・予算案の提案があり、原案通り承認されました。最後に、校友会活動の報告、100周年記念事業の報告およびご支援のお願いがありました。懇親会はコロナ禍により中止する事となりました。

３．学生活動への支援

例年通り、工学部学生が主体となっている課外活動に対し、５団体（フォーミュラ・プロジェクト、ロボコン、卒業設計展2022、CUAD、意匠展2022）に総額100万円を支援しました。

４．新入生・卒業生および退職教員への記念品贈呈

新入生690名に多色ボールペン、男性卒業生495名にネクタイピン、女性卒業生147名にリングを贈呈しました。さらに、同窓会にご貢献いただいた須貝康雄先生に金のネクタイピンを退職記念として贈呈しました。

５．工学部への支援

会費徴収等でもお世話になっている工学部の各種活動に賛助金として支援しました。工学部アーカイブ整備にも活用されています。

６．非常勤講師に対する援助

実社会で活躍されている学外講師による講義の実施のために、講演謝金を援助しました。

７．千葉大学校友会

令和３年度校友会総会につきましては、書面審議にて開催し懇親会はコロナ禍により中止となりました。

８．工学部創立100周年記念事業

令和３年12月16日第１回100周年記念事業委員会を開催しました。

令和３年度
千葉大学工学同窓会 決算

■収入の部

（単位：円）

費　目	予　算①	決　算②	①－②
前年度繰越金	270,386	270,386	0
入会金	6,750,000	6,650,000	100,000
会費	2,200,000	1,590,000	610,000
寄附金	2,100,000	2,110,000	△ 10,000
総会参加費	50,000	0	50,000
利息・雑収入	10	0	10
特別会計から繰入	0	20,000	△ 20,000
合　計	11,370,396	10,640,386	730,010

■支出の部

（単位：円）

費　目	予　算①	決　算②	①－②
会報編集発行	4,800,000	4,779,383	20,617
入学・卒業記念品費	1,000,000	964,095	35,905
総会経費	150,000	7,708	142,292
名簿管理費	220,000	220,000	0
HP 費	100,000	107,800	△ 7,800
部会・支部活動補助費	650,000	629,000	21,000
工学部賛助金	700,000	600,000	100,000
校友会費	150,000	150,000	0
学生援助費	1,000,000	1,000,000	0
非常勤講師援助費	500,000	300,000	200,000
会議費	50,000	0	50,000
渉外費	50,000	8,506	41,494
学内懇親会費	100,000	0	100,000
慶弔費	50,000	26,500	23,500
郵送通信費	450,000	458,874	△ 8,874
交通費	90,000	80,680	9,320
幹事担当部会運営費	30,000	0	30,000
事務員費	1,000,000	978,000	22,000
消耗品費	50,000	14,822	35,178
事務運営費	20,000	0	20,000
事務室備品費	50,000	83,449	△ 33,449
雑費	50,000	39,700	10,300
創立100周年記念事業費	100,000	100,700	△ 700
特別会計繰入金	0	0	0
予備費	10,396	0	10,396
繰越金	0	91,169	△ 91,169
合　計	11,370,396	10,640,386	730,010

2022年度総会について

令和４年５月21日（土）、千葉大学工学同窓会定時総会を開催いたしました。令和４年度は、例年通り西千葉キャンパスけやき会館大ホールにて定時総会を行い、続いて同会館３階レセプションホールにて懇親会を開催して卒業生の皆様との交流を深めさせていただく予定としておりました。しかし、令和２年の春から続くコロナ禍が収まる気配もない事から、令和４年度も誠に残念ながら昨年度に引き続きオンラインと現地でのハイブリッド開催となりました。千葉大学での会場は、昨年度同様松韻会館大会議室とさせていただきました。現地会場には新幹事長および100周年記念事業にご尽力いただいている宮崎紀郎千葉大学名誉教授、小林謙一千葉大学名誉教授そして佐藤之彦工学研究院長もご出席されました。定時総会では、任期２年目となる橋本浩行会長（Ｖ部会）が議長として指名され、副幹事長の岸川圭希教授（Ｖ部会）の司会のもと始まりました。最終的な現地出席者は32名でした。最初に、上川直文・幹事長（Ｖ部会）より令和３年度の事業報告ならびに決算報告があり、次いで原　正樹・学外会計監事（Ｉ部会）から会計監査報告がありました。これらの議案について、賛成多数にて承認されました。次に、令和４年度の役員選出が提案され、これについても賛成多数にて承認されました。さらに、上川直文・令和４年度幹事長（Ｖ部会）より令和４年度の事業計画および予算案が提案され、質疑のあと、賛成多数にて承認されました。次に、上川直文・令和３年度校友会幹事より、校友会活動について報告がありました。次いで、小坏成一・100周年記念事業委員長より、100周年記念事業について準備報告が行われた後、コロナ禍の状況が改善されないため100周年記念式典の開催のさらなる延期が提案され承認されました。さらに、同事業に対する寄附金の募集について現状報告がありました。最後に、司会の岸川圭希教授（Ｖ部会）より閉会宣言があり、定時総会は終了しました。来年度の定時総会と懇親会は、状況が改善されましたらけやき会館にて令和５年春に開催予定です。是非お越しください。また、総会開催方法などについては状況により変更がございますので工学同窓会ホームページでのご確認もお願いいたします。

工学部改組とこれに伴う同窓会部会の対応について

平成29年度工学部改組による新コース名と対応する各部会、ならびに旧学科の対応関係は以下の通りです。

新コース名称	対応部会	対応する旧学科
建築学コース	**第Ⅱ部会**	木材・建築・デザイン工学科建築系
都市環境システムコース	**第Ⅹ部会**	都市環境システム
デザインコース	**第Ⅰ部会**	図案・彫刻・造形・意匠・デザイン工学科意匠系
機械工学コース	**第Ⅲ部会**	金属・精機・機械・機械第二・電子機械工学科機械系
医工学コース	**第Ⅺ部会**	メディカルシステム
電気電子工学コース	**第Ⅳ部会**	電気・電子・電気電子・電子機械工学科電気電子系
物質科学コース	**第Ⅻ部会**	ナノサイエンス
情報工学コース	**第Ⅵ,Ⅶ部会** **第Ⅷ部会**	写真・印刷・画像・画像応用・情報画像工学科画像系・画像科学情報・情報画像工学科情報系・情報画像学科
共生応用化学コース	**第Ⅴ,Ⅸ部会**	工業化学・合成化学・応用化学・機能材料工学・物質工学

寄附者一覧

（注）特は特別会員（現旧職員、ただし正会員は除く）、（ ）内は所属部会
令和３年度（令和３年４月１日～令和４年３月31日）

■ 100口 ■
齋藤久美子 （Ⅳ）

■ 30口 ■
中村 紀雄 （Ⅳ）

■ 20口 ■
藤井 茂 （Ⅱ）
山田 雅敏 （Ⅱ）
小野原 勉 （Ⅲ）

■ 19口 ■
峰田 富康 （Ⅵ）

■ 10口 ■
小笠原伸一 （Ⅰ）
菊地 禮 （Ⅰ）
井田 良市 （Ⅱ）
尾形 廣信 （Ⅱ）
白石 輝光 （Ⅱ）
内藤 洪一 （Ⅱ）
西野 晴仁 （Ⅱ）
張替 勝雄 （Ⅱ）
増田 裕保 （Ⅱ）
小川 秀雄 （Ⅲ）
中村 逸 （Ⅲ）
永井 親久 （Ⅲ）
矢野 宏 （Ⅲ）
山本 直樹 （Ⅲ）
川合 利之 （Ⅳ）
宿谷 正典 （Ⅳ）
杉崎 正治 （Ⅳ）
玉沢 学 （Ⅳ）
砂原 一夫 （Ⅴ）
田中 秀典 （Ⅴ）
橋本 浩行 （Ⅴ）
山浦 國利 （Ⅴ）
工化40白バラ会 （Ⅴ）
中島 一成 （Ⅵ）
千葉 大奨 （共生）
米地 正大 （電機）

■ 9口 ■
中澤 文隆 （Ⅰ）
大久保雄司 （Ⅱ）
菅野 良司 （Ⅱ）
正村 昭孝 （Ⅲ）
柳澤 章 （Ⅲ）
石田裕一郎 （Ⅳ）
草深 博好 （Ⅳ）
大宮 秀一 （Ⅴ）
川舩 正康 （Ⅴ）
長谷川 治 （Ⅴ）
吉田 俊夫 （Ⅴ）
犬養 俊輔 （Ⅶ）

■ 8口 ■
津下 豊彦 （Ⅲ）

■ 7口 ■
緒方 一裕 （Ⅲ）

■ 6口 ■
椎名 國雄 （Ⅱ）
成毛喜一郎 （Ⅳ）

■ 5口 ■
宮本 茂子 （Ⅰ）
宮本 襄 （Ⅰ）
賀井伸一郎 （Ⅱ）
坂口 秋一 （Ⅱ）
田邉 宏志 （Ⅱ）
中川 利夫 （Ⅱ）
青木 一郎 （Ⅲ）
大角 忠 （Ⅲ）
藤代 裕 （Ⅲ）
菊地 大介 （Ⅳ）
丹野 雅行 （Ⅳ）
河村 信夫 （Ⅴ）
福山賛次郎 （Ⅴ）
石原 礼子 （Ⅹ）
瞿 成功 （Ⅹ）
新村 和彦 （Ⅹ）
小笠原伊織 （院全）

■ 4口 ■
大沼 隆 （Ⅰ）
原 正樹 （Ⅰ）
谷口 寛明 （Ⅱ）
徳田 彰士 （Ⅱ）
中野清一郎 （Ⅱ）
松本 靖司 （Ⅱ）
森 勝一 （Ⅱ）
若松 永 （Ⅱ）
安達 博一 （Ⅲ）
五十嵐 実 （Ⅲ）
日下部隆久 （Ⅲ）
坂本 和也 （Ⅲ）
中島 重利 （Ⅲ）
永野 務 （Ⅲ）
長沢 秀雄 （Ⅲ）
馬場 和幸 （Ⅲ）
山下 嘉久 （Ⅲ）
新井 道郎 （Ⅳ）
飯塚 矩規 （Ⅳ）
小西 寛 （Ⅳ）
清水洋太郎 （Ⅳ）
中台 照幸 （Ⅳ）
階上 保 （Ⅳ）
林 久雄 （Ⅳ）
比田井 裕 （Ⅳ）
相沢 輝樹 （Ⅴ）
大谷 博之 （Ⅴ）
勝田信一郎 （Ⅴ）
河辻 輝之 （Ⅴ）
菊池 康一 （Ⅴ）
長谷川清和 （Ⅴ）
松尾 弘任 （Ⅴ）
水谷 惟恭 （Ⅴ）
物井 惠一 （Ⅴ）
柳田 利幸 （Ⅴ）
芳野 禎文 （Ⅴ）
入山 隆 （Ⅵ）
片桐 徹 （Ⅵ）
日比野繁雄 （Ⅵ）
平賀 祐二 （Ⅵ）
吉野 博弼 （Ⅵ）
青山 俶雄 （Ⅶ）
有川 徹 （Ⅶ）
大野 仁 （Ⅶ）
片山 亮吾 （Ⅶ）
久保田 豪 （Ⅶ）
押田 祐希 （院全）
工藤 泰代 （院全）
武川 毅 （院全）
近藤 親平 （物工）
木村信太郎 （電機）
鈴木 洋行 （意建）
小門 宏 （職員）
堀田 明裕 （職員）

■ 3口 ■
浅野 英昭 （Ⅰ）
北山 睦人 （Ⅰ）
小幡 和夫 （Ⅱ）
大林 和彦 （Ⅱ）
二村 陽子 （Ⅱ）
山田 憲司 （Ⅱ）
阿波野康彦 （Ⅲ）
石田 大志 （Ⅲ）
笹川 俊勝 （Ⅲ）
園山 芳 （Ⅲ）
田口 正信 （Ⅲ）
武之内教男 （Ⅲ）
中村 一馬 （Ⅲ）
林 侑孝 （Ⅲ）
広瀬 正敦 （Ⅲ）
松田 隆雄 （Ⅲ）
宮本 厳恭 （Ⅲ）
山本 賀彦 （Ⅲ）
渡辺 謙一 （Ⅲ）
及川 勝一 （Ⅳ）
片野 彰 （Ⅴ）
久世 茂樹 （Ⅴ）
鈴木 淳 （Ⅴ）
中村佐紀子 （Ⅴ）
浜田 孝夫 （Ⅴ）
平井 公徳 （Ⅴ）
松尾 廣一 （Ⅴ）
森 元 （Ⅴ）
矢野 敬弥 （Ⅴ）
若松 二郎 （Ⅴ）
酒井 伸和 （Ⅵ/Ⅶ）
木内洋太郎 （Ⅶ）
三村 到 （Ⅶ）
佐俣 大輔 （院全）
井上 麗子 （電機）

■ 2口 ■
秋岡 敏郎 （Ⅰ）
岡田 優 （Ⅰ）
岡本 浩志 （Ⅰ）
加藤 久夫 （Ⅰ）
香西 一雄 （Ⅰ）
甲斐 茂 （Ⅰ）
古森 亮二 （Ⅰ）
澤口 正武 （Ⅰ）
関 壮一 （Ⅰ）
髙橋 和靖 （Ⅰ）
高橋 正 （Ⅰ）
寺田 重順 （Ⅰ）
林 孝一 （Ⅰ）
御園 秀一 （Ⅰ）
森川 明 （Ⅰ）
安生 満 （Ⅱ）
安藤 伸治 （Ⅱ）
岩瀬 真理 （Ⅱ）
榎本 茂治 （Ⅱ）
尾上 孝一 （Ⅱ）
越智 英明 （Ⅱ）
大家 教正 （Ⅱ）
大美賀久夫 （Ⅱ）
大室 裕 （Ⅱ）
太田 泰男 （Ⅱ）
長田 勝彦 （Ⅱ）
加藤 宏一 （Ⅱ）
金沢 健蔵 （Ⅱ）
河津 亘 （Ⅱ）
小林 孝至 （Ⅱ）
坂口 守夫 （Ⅱ）
澤本 保夫 （Ⅱ）
正法地紀之 （Ⅱ）
鈴木 忠道 （Ⅱ）
勢木宇太郎 （Ⅱ）
善養寺圭吾 （Ⅱ）
田口 裕一 （Ⅱ）
高橋 八朗 （Ⅱ）
竹中 一雄 （Ⅱ）
塚田 英武 （Ⅱ）
塚本 正臣 （Ⅱ）
土屋 明子 （Ⅱ）
中島 將好 （Ⅱ）
中村喜久雄 （Ⅱ）
萩原 吉春 （Ⅱ）
平野 栄一 （Ⅱ）
星川 信 （Ⅱ）
増田 正樹 （Ⅱ）
松崎 徹 （Ⅱ）
松本 和浩 （Ⅱ）
三好 尚武 （Ⅱ）
室 英治 （Ⅱ）
山﨑 眞詠 （Ⅱ）
吉崎 春雄 （Ⅱ）
吉澤 輝三 （Ⅱ）
吉原 敏裕 （Ⅱ）
渡辺 光雄 （Ⅱ）
安藤 裕之 （Ⅲ）
荒井 茂 （Ⅲ）
池田克登志 （Ⅲ）
石橋 範宣 （Ⅲ）
小川 貴史 （Ⅲ）
川尻 順一 （Ⅲ）
河田 進 （Ⅲ）
菊池 健二 （Ⅲ）
倉林 克行 （Ⅲ）
桑田 毅 （Ⅲ）
桑原 健郎 （Ⅲ）
小林 貞彦 （Ⅲ）
佐々木 理 （Ⅲ）
佐々木裕幸 （Ⅲ）
下村 孝 （Ⅲ）
島田 雅吉 （Ⅲ）
鈴木 洋 （Ⅲ）
鈴木 誠 （Ⅲ）
清宮 和真 （Ⅲ）
相馬 一朗 （Ⅲ）
園田 治朗 （Ⅲ）
田辺 和一 （Ⅲ）
出口 伸幸 （Ⅲ）
融 成三 （Ⅲ）
中村 雅勇 （Ⅲ）
中村 仁 （Ⅲ）
中山 勝博 （Ⅲ）
永田 朗 （Ⅲ）
長井英太郎 （Ⅲ）
長浜 孝夫 （Ⅲ）
根本 一郎 （Ⅲ）
蝿庭 正信 （Ⅲ）
英 聖一 （Ⅲ）
林 靜男 （Ⅲ）
平井 秀明 （Ⅲ）
廣瀬 喜明 （Ⅲ）
廣橋 光治 （Ⅲ）
藤田 尚美 （Ⅲ）
松崎 久徳 （Ⅲ）
三代川滋則 （Ⅲ）

村瀬　英俊　（Ⅲ）
山口　　優　（Ⅲ）
山崎　秀夫　（Ⅲ）
山崎　主雄　（Ⅲ）
山澤　智仁　（Ⅲ）
吉沼　幹夫　（Ⅲ）
米田　　喬　（Ⅲ）
天野　譯溥　（Ⅳ）
井本　一彦　（Ⅳ）
伊藤　哲夫　（Ⅳ）
石踊　　誠　（Ⅳ）
今田　伸司　（Ⅳ）
岩瀬　健志　（Ⅳ）
小笠原弘適　（Ⅳ）
加藤　洋一　（Ⅳ）
蔭山　之雄　（Ⅳ）
金沢　一良　（Ⅳ）
河内　明夫　（Ⅳ）
草野　祐一　（Ⅳ）
佐藤　光一　（Ⅳ）
酒井　　洋　（Ⅳ）
杉本　和英　（Ⅳ）
田村　重雄　（Ⅳ）
高山　建三　（Ⅳ）
中川　敏裕　（Ⅳ）
芳賀　光雄　（Ⅳ）
羽生田健二　（Ⅳ）
御園　信行　（Ⅳ）
宮原　一敏　（Ⅳ）
村上　豪厚　（Ⅳ）
保田　広安　（Ⅳ）
山下　重雄　（Ⅳ）
吉田　生雄　（Ⅳ）
浅見　栄二　（Ⅴ）
石丸　貞冬　（Ⅴ）
稲木　秀次　（Ⅴ）
上田　卓是　（Ⅴ）
梅田　正造　（Ⅴ）
奥山　敏樹　（Ⅴ）
片岡　　正　（Ⅴ）
片川　芳郎　（Ⅴ）
蕪木　健二　（Ⅴ）
川嶋　静雄　（Ⅴ）
鯨岡　陽子　（Ⅴ）
熊野　清彦　（Ⅴ）
栗原　信介　（Ⅴ）
佐々木健一　（Ⅴ）
佐藤　栄司　（Ⅴ）
斎藤　晴夫　（Ⅴ）
清水　博之　（Ⅴ）
杉山　　武　（Ⅴ）
田中　昌幸　（Ⅴ）
田辺　敏夫　（Ⅴ）
高橋　建司　（Ⅴ）
橘　　宗昭　（Ⅴ）
反保　一雄　（Ⅴ）
地曳　広志　（Ⅴ）
豊島　晴子　（Ⅴ）
中村　幸男　（Ⅴ）
府中　裕一　（Ⅴ）
藤澤　義和　（Ⅴ）
増田　啓司　（Ⅴ）
村雄　弘尚　（Ⅴ）
村田　正行　（Ⅴ）
山崎　泰洋　（Ⅴ）
結城　命夫　（Ⅴ）
吉田　　博　（Ⅴ）
渡辺　光司　（Ⅴ）
今城　力夫　（Ⅵ）
大森　雅久　（Ⅵ）
勝田　禎治　（Ⅵ）
斉藤　光範　（Ⅵ）
下田屋　眞　（Ⅵ）
土屋　元彦　（Ⅵ）
徳江　雅宏　（Ⅵ）
中村　勝利　（Ⅵ）
平林　利文　（Ⅵ）
広瀬　祐三　（Ⅵ）
宮田　弘幸　（Ⅵ）
山口　　弘　（Ⅵ）
吉村　節子　（Ⅵ）
渡辺　　惇　（Ⅵ）
穐谷　久人　（Ⅶ）
淡路　延也　（Ⅶ）
芝木　儀夫　（Ⅶ）
中島　昭博　（Ⅶ）
沼野　博文　（Ⅶ）
丸山美恵子　（Ⅶ）
渋谷　岳人　（Ⅵ/Ⅶ）
山本　　衛　（Ⅵ/Ⅶ）
高橋　　愛　（Ⅷ）
早川勝一郎　（Ⅸ）
福永　博哉　（Ⅸ）
二見　泰雄　（Ⅸ）
安藤　賢孝　（Ⅹ）
岡野　直美　（Ⅹ）
清水いそ江　（Ⅹ）
長谷川雄祐　（Ⅹ）
青木　茂樹　（院全）
赤江　信哉　（院全）
赤木　卓也　（院全）
稲垣　友梨　（院全）
浦部　裕亮　（院全）
川口　晃平　（院全）
増田　健二　（院全）
林　鴻太朗　（院全）
藤原　雅利　（院全）
松田　高博　（物工）
小林　　航　（電機）
角田祥次郎　（電機）
松井菜月希　（意建）
浅野　　惇　（総工）
後田　理雄　（総工）
坂本　裕彬　（総工）
鈴木万里奈　（総工）
森　　典彦　（職員）

■　1口　■

上田　謙作　（Ⅰ）
株本　正昭　（Ⅰ）
川添　集朗　（Ⅰ）
木村　　護　（Ⅰ）
小嶋　良一　（Ⅰ）
佐渡山安彦　（Ⅰ）
酒井　重彌　（Ⅰ）
笹倉　敏夫　（Ⅰ）
澤田　　均　（Ⅰ）
志村　雄逸　（Ⅰ）
渋谷　久紀　（Ⅰ）
鈴木七七夫　（Ⅰ）
田辺　雄次　（Ⅰ）
立部　紀夫　（Ⅰ）
中野　正孝　（Ⅰ）
野口　尚孝　（Ⅰ）
星野　隆三　（Ⅰ）
堀　　俊一　（Ⅰ）
前川　　健　（Ⅰ）
武藤　栄希　（Ⅰ）
諸星　和夫　（Ⅰ）
安井　　敏　（Ⅰ）
山口　　明　（Ⅰ）
山田　卓生　（Ⅰ）
米村　　勉　（Ⅰ）
渡辺　　勤　（Ⅰ）
赤塚　　巌　（Ⅱ）
浅川　哲治　（Ⅱ）
東　　正一　（Ⅱ）
伊藤　　明　（Ⅱ）
池田　憲一　（Ⅱ）
石月　謙一　（Ⅱ）
石橋　　実　（Ⅱ）
岩崎　哲朗　（Ⅱ）
上坂　省二　（Ⅱ）
江川　太吉　（Ⅱ）
大西　宏美　（Ⅱ）
大和田包明　（Ⅱ）
太田　達見　（Ⅱ）
金子　亮太　（Ⅱ）
川田　暢子　（Ⅱ）
木下　昭彦　（Ⅱ）
木下　理智　（Ⅱ）
喜地　良男　（Ⅱ）
桐谷　治孝　（Ⅱ）
栗谷川哲雄　（Ⅱ）
佐藤　初美　（Ⅱ）
佐藤　光徳　（Ⅱ）
斎藤　敏夫　（Ⅱ）
作間　　健　（Ⅱ）
清水　四郎　（Ⅱ）
塩出　博教　（Ⅱ）
菅　　重夫　（Ⅱ）
瀬戸　　守　（Ⅱ）
田中　修一　（Ⅱ）
高原　正弘　（Ⅱ）
竹生　敏俗　（Ⅱ）
筒井　増男　（Ⅱ）
寺岡　哲平　（Ⅱ）
富永　慶宇　（Ⅱ）
丹羽　正徳　（Ⅱ）
西本　好男　（Ⅱ）
野口　哲夫　（Ⅱ）
橋本　康夫　（Ⅱ）
畑野　　肇　（Ⅱ）
引地　健彦　（Ⅱ）
藤本　　匡　（Ⅱ）
藤巻　清高　（Ⅱ）
真柴　正徳　（Ⅱ）
増田　茂典　（Ⅱ）
三川　光司　（Ⅱ）
宮本　圭一　（Ⅱ）
村中　恭一　（Ⅱ）
村松　克彦　（Ⅱ）
室殿　一哉　（Ⅱ）
森　　敏章　（Ⅱ）
矢作　　茂　（Ⅱ）
山田　雄一　（Ⅱ）
吉田　英雄　（Ⅱ）
和田　為義　（Ⅱ）
和田　高清　（Ⅱ）
相沢　芳彦　（Ⅲ）
麻生　　正　（Ⅲ）
井上　浩一　（Ⅲ）
伊藤　宏治　（Ⅲ）
生駒　達一　（Ⅲ）
石井ひでみ　（Ⅲ）
石川　正彦　（Ⅲ）
市川　浩伸　（Ⅲ）
岩井　隆夫　（Ⅲ）
岩佐　弘志　（Ⅲ）
岩本　光則　（Ⅲ）
上田　俊弘　（Ⅲ）
植木淳一郎　（Ⅲ）
梅津　　浩　（Ⅲ）
遠藤　誠久　（Ⅲ）
遠藤　範夫　（Ⅲ）
小口　博義　（Ⅲ）
小野　哲哉　（Ⅲ）
尾高　猛敏　（Ⅲ）
大沼　　毅　（Ⅲ）
岡野　史明　（Ⅲ）
加藤　次雄　（Ⅲ）
川井　秀夫　（Ⅲ）
木村　　徹　（Ⅲ）
小池　幸仁　（Ⅲ）
小出　富夫　（Ⅲ）
古作　康幸　（Ⅲ）
佐藤　雄三　（Ⅲ）
斎藤　　徹　（Ⅲ）
白鳥　邦治　（Ⅲ）
鈴木　幹人　（Ⅲ）
瀬戸　勝幸　（Ⅲ）
田川　正洋　（Ⅲ）
田谷　耕一　（Ⅲ）
高木　章次　（Ⅲ）
谷本　信雄　（Ⅲ）
塚越　一基　（Ⅲ）
戸原　　惹　（Ⅲ）
徳屋　友彦　（Ⅲ）
中村　良太　（Ⅲ）
仲岸　　優　（Ⅲ）
根岸　廣介　（Ⅲ）
日野　俊昭　（Ⅲ）
日向　武夫　（Ⅲ）
平出　礼一　（Ⅲ）
広瀬　次郎　（Ⅲ）
福田　　昭　（Ⅲ）
藤岡　久武　（Ⅲ）
古屋　治雄　（Ⅲ）
本忠　瑞穂　（Ⅲ）
俣木　秀久　（Ⅲ）
松井　雅男　（Ⅲ）
三宅　伸治　（Ⅲ）
宮原　修身　（Ⅲ）
諸橋　久重　（Ⅲ）
山岸　祐二　（Ⅲ）
山崎　英昭　（Ⅲ）
脇田　康之　（Ⅲ）
渡辺　清和　（Ⅲ）
渡辺　信彦　（Ⅲ）
青木　基郎　（Ⅳ）
浅沼　俊一　（Ⅳ）
伊藤　秀男　（Ⅳ）
池田　健二　（Ⅳ）
岩田　春久　（Ⅳ）
上野　文男　（Ⅳ）
上野　　豊　（Ⅳ）
上原　明雄　（Ⅳ）
薄葉　光弘　（Ⅳ）
榎並　　誠　（Ⅳ）
大平　芳史　（Ⅳ）
鬼塚　利行　（Ⅳ）
加藤　裕之　（Ⅳ）
金子　啓三　（Ⅳ）
兼八　　薫　（Ⅳ）
神田　憲治　（Ⅳ）
岸田　　勇　（Ⅳ）
倉上　一郎　（Ⅳ）
小板橋　徹　（Ⅳ）
小久保　優　（Ⅳ）
小林　研也　（Ⅳ）
佐竹　忠臣　（Ⅳ）
坂原　義夫　（Ⅳ）
篠崎　國雄　（Ⅳ）
柴　　忠敏　（Ⅳ）
鈴木　郁夫　（Ⅳ）
鈴木　千春　（Ⅳ）
鈴木　孝志　（Ⅳ）
相馬　敦郎　（Ⅳ）
髙田　　洋　（Ⅳ）
近岡　　宏　（Ⅳ）
塚本　明人　（Ⅳ）

中井　延雄	(Ⅳ)	善場　研也	(Ⅴ)	次田　　誠	(Ⅵ)	倉澤　直則	(Ⅶ)	鈴木　純子	(X)
中村　孝広	(Ⅳ)	田中　　満	(Ⅴ)	手塚　辰保	(Ⅵ)	黒川　　静	(Ⅶ)	高橋　和克	(X)
長野　浩俊	(Ⅳ)	田中　聖之	(Ⅴ)	寺沢　賢一	(Ⅵ)	下川原厚男	(Ⅶ)	塚越愛樹彦	(X)
二宮　　功	(Ⅳ)	高澤　　祐	(Ⅴ)	照井　與泰	(Ⅵ)	島　　基之	(Ⅶ)	檜山　友佑	(X)
西塚　晶彦	(Ⅳ)	高月　健一	(Ⅴ)	中澤　克紀	(Ⅵ)	新宮領　慧	(Ⅶ)	古月　美惠	(X)
橋本　　聡	(Ⅳ)	高橋比等良	(Ⅴ)	中村　甚継	(Ⅵ)	鈴木　　敦	(Ⅶ)	弓田　　博	(X)
福田　康夫	(Ⅳ)	竹田　和俊	(Ⅴ)	野崎　和夫	(Ⅵ)	田林　　勲	(Ⅶ)	吉井　昭宏	(X)
藤枝　昌行	(Ⅳ)	武内　芳夫	(Ⅴ)	野呂伊佐美	(Ⅵ)	高橋　健二	(Ⅶ)	木村　友紀	(院全)
藤倉　信之	(Ⅳ)	千葉　友介	(Ⅴ)	浜田　　聡	(Ⅵ)	竹原　　悟	(Ⅶ)	小林　隆太	(院全)
古川　秀樹	(Ⅳ)	鶴田　利彦	(Ⅴ)	林　　努	(Ⅵ)	玉井　正義	(Ⅶ)	吉井　孝子	(院全)
槙　　一光	(Ⅳ)	戸田　雅也	(Ⅴ)	原　　忠義	(Ⅵ)	辻　　和雄	(Ⅶ)	大澤　佑介	(院全)
松原　聡志	(Ⅳ)	内藤　季和	(Ⅴ)	比良　文男	(Ⅵ)	手塚　景二	(Ⅶ)	和田　賢二	(院全)
丸山　敏夫	(Ⅳ)	野上　哲雄	(Ⅴ)	平野　長愛	(Ⅵ)	貫井　義昭	(Ⅶ)	神林　辰洋	(院全)
三浦眞由美	(Ⅳ)	野口　英夫	(Ⅴ)	福田　　信	(Ⅵ)	野本　　林	(Ⅶ)	紙谷　珠生	(院全)
三木　克巳	(Ⅳ)	堀　　雅樹	(Ⅴ)	藤橋三千男	(Ⅵ)	長谷川隆史	(Ⅶ)	ｼｭﾋﾟﾝﾄﾞﾗｰ慧敏	(院全)
見月　真人	(Ⅳ)	松永　得雄	(Ⅴ)	船戸　広義	(Ⅵ)	林　三千男	(Ⅶ)	藤澤　洋平	(院全)
村上　武志	(Ⅳ)	三浦　恵美	(Ⅴ)	村上　　隆	(Ⅵ)	樋口　宗治	(Ⅶ)	嶋田　優斗	(メ)
茂木　節雄	(Ⅳ)	村田　　潔	(Ⅴ)	諸岡　征之	(Ⅵ)	深田　一弘	(Ⅶ)	今泉　典子	(物工)
茂木　　稔	(Ⅳ)	守　　敏男	(Ⅴ)	柳沢　栄二	(Ⅵ)	藤森　　博	(Ⅶ)	大野　裕介	(物工)
本橋　昭二	(Ⅳ)	森元　忠夫	(Ⅴ)	山田　義彦	(Ⅵ)	程谷　　隆	(Ⅶ)	佃　えり子	(物工)
矢地　竹男	(Ⅳ)	山田　信彦	(Ⅴ)	山高　修一	(Ⅵ)	松根　　格	(Ⅶ)	濱野　一平	(物工)
山﨑　和次	(Ⅳ)	山本　晋介	(Ⅴ)	渡辺　幸保	(Ⅵ)	緑川　文男	(Ⅶ)	橋本理恵子	(情報)
山本　吾郎	(Ⅳ)	吉野　　節	(Ⅴ)	青木　　功	(Ⅵ/Ⅶ)	宮良　　勉	(Ⅶ)	林　賢太郎	(情報)
若林　　淳	(Ⅳ)	厚見　　透	(Ⅵ)	大井　宏友	(Ⅵ/Ⅶ)	山田　敏雄	(Ⅶ)	志村　祥隆	(画像)
東　　克巳	(Ⅴ)	石田　浩男	(Ⅵ)	金木　真人	(Ⅵ/Ⅶ)	山田　　旬	(Ⅶ)	信太　祐希	(画像)
有田　　潔	(Ⅴ)	石田　研三	(Ⅵ)	志水　　誠	(Ⅵ/Ⅶ)	山村　　隆	(Ⅶ)	氏原　芳朗	(電機)
伊倉賢一郎	(Ⅴ)	市來　逸彦	(Ⅵ)	菅原　勝彦	(Ⅵ/Ⅶ)	池谷　友仁	(Ⅷ)	内田　　亮	(電機)
飯島　昭雄	(Ⅴ)	小田　　透	(Ⅵ)	沼本　　格	(Ⅵ/Ⅶ)	大塚　　武	(Ⅷ)	小川　尚記	(電機)
石塚　　洋	(Ⅴ)	雄倉　保嗣	(Ⅵ)	東　　哲司	(Ⅵ/Ⅶ)	倉持　匠弘	(Ⅷ)	小佐野智之	(電機)
浦和茂登男	(Ⅴ)	大澤　郁夫	(Ⅵ)	渡部　　守	(Ⅵ/Ⅶ)	佐々木　聡	(Ⅷ)	梶原　紘嗣	(電機)
大木　剛夫	(Ⅴ)	大原　　仁	(Ⅵ)	植竹　優一	(Ⅶ)	佐々木　宏	(Ⅷ)	佐藤　裕紀	(電機)
大塚　一徳	(Ⅴ)	影山　雅英	(Ⅵ)	海老原光男	(Ⅶ)	赤井　邦彦	(Ⅸ)	田中　有弥	(電機)
香川　　喬	(Ⅴ)	金子　　茂	(Ⅵ)	小野　雅行	(Ⅶ)	中島雄一郎	(Ⅸ)	武田　圭二	(電機)
北谷　純治	(Ⅴ)	小出　哲司	(Ⅵ)	大塚　康信	(Ⅶ)	西岡　潤二	(Ⅸ)	山田　琢磨	(電機)
熊田　浩明	(Ⅴ)	斉藤　延夫	(Ⅵ)	岡松　暁夫	(Ⅶ)	藤巻　史郎	(Ⅸ)	山本　教介	(電機)
小林　敬古	(Ⅴ)	斉藤　　彰	(Ⅵ)	加瀬　元禮	(Ⅶ)	柳　　昭男	(Ⅸ)	加藤わかな	(意建)
腰山　伊彦	(Ⅴ)	白鳥真太郎	(Ⅵ)	亀山　　誠	(Ⅶ)	安藤　幸次	(X)	原山　聡子	(意建)
近藤　清彦	(Ⅴ)	地引　　勝	(Ⅵ)	川口　恵造	(Ⅶ)	秋元　文江	(X)	伊藤希美香	(総工)
境　　祐司	(Ⅴ)	杉本彩二郎	(Ⅵ)	川島　　誠	(Ⅶ)	岩井　玲子	(X)	栢口　英之	(総工)
澤野　　守	(Ⅴ)	曽我部　摺	(Ⅵ)	河野　幸司	(Ⅶ)	大木　　登	(X)	宮本菜々華	(総工)
三枝　赳夫	(Ⅴ)	田村　知久	(Ⅵ)	北村　孝司	(Ⅶ)	片野　正彦	(X)	山﨑　　駿	(総工)
須藤　邦昌	(Ⅴ)	高橋　恭介	(Ⅵ)	九門　　明	(Ⅶ)	喜美候部継示	(X)	髙梨　晃一	(職員)
杉森　由章	(Ⅴ)	高橋　英昭	(Ⅵ)	久家　　毅	(Ⅶ)	白石　雅士	(X)		

100周年記念事業寄附者一覧

令和３年４月１日～令和４年３月31日

※お名前のみ掲載しております。
※振込用紙のお名前の公表の有無について未記入の方のお名前は掲載しておりません。予めご了承ください。

■ 10口 ■
花王株式会社

■ 2口 ■
カリモク皆栄株式会社

■ 1.1口 ■
工化40白ばら会

■ 1口 ■
株式会社エスキース
株式会社千都建築設計事務所

■ 200口 ■
松谷　貫司

■ 150口 ■
吉川　研一

■ 100口 ■
松久　　卓
松永　茂妥
三浦　邦夫
西田　幸生
長谷川　治
榊　　陽
宮原　修身
佐藤　栄司

■ 76口 ■
玉木　髙夫

■ 50口 ■
小川　秀雄
大林　和彦
中村　紀雄

■ 30口 ■
野田　英夫
大宮　秀一

■ 20口 ■
野口　睦
中村佐紀子
土屋　元彦
福山賛次郎
功刀　正博
森　崇
猪野　三夫
鎌田　成之
加藤　裕志
中村喜久雄

■ 15口 ■
水谷　惟恭

■ 12口 ■
白石　拓也
益山　進
横井　学

■ 10口 ■
大滝　正道
諸星　和夫
芝木　儀夫
中谷　正人
竹田　知平
藤田　尚美
北原　理雄
三野　育宏
杉村亥一郎
川口　有弘
中台　照幸
原田　俊丈
椎名　國雄
鈴木　浩
岡田　直樹
秋山かおり
赤江　信哉
佐藤　正
北原まゆみ
太田　正和
綿引　芳朗
石﨑　長俊
永岡　一信
船戸　広義
荒井　薫
石月　謙一
田辺　雄次
齊藤　清高
徳屋　友彦
塩川　安彦
沼野　博文
山本　衛
薄葉　洋
塚本　明人
大久保雄司
中澤　大地
稲見　一郎
大井　宏友
小嶋　良一
佐藤　光一
増田　豊一
久保田　豪
菊池　康一
藤倉　信之
本間　茂男
稲垣　雅人
片岡　昭之
山本　教介
杉森　由章
大出　明
石原　礼子
室　英治
天野　譯溥
甲斐　茂
山本　匡哉
佐俣　大輔
赤羽　元英
湯本　直明
美濃口正典
蕪木　脩
武川　毅
湯浅　文夫
後藤　哲朗
屋代　展男
片山　成
石原　賢
橋詰　正芳
小関理惠子
長田　勝彦
松川　友一
渋川　岳郎
三好　尚武
牧野　清志
川口　晃
三沢　節雄
川嶋　静雄
鈴木　孝志
原　忠義
山﨑　主雄
府中　裕一
北川浩一郎
植田　武志
岩瀬　真理
大角　忠
蔭山　之雄
本多　敏子
鈴木　淳
鈴木　信弘
岡本　浩志
荒川　元一
小林　春彦
秋澤　新二
井本　一彦
岩田　顕
芝木　儀夫
高橋　清治
嶋　惠三
大木　繁夫
浦部　裕亮
平野　栄一
中村　甚継
鈴木　信
照井　隆
白石　輝光
山口　正裕
宿谷　正典
羽生田健二
植木淳一郎
三国　政勝
伊藤　秀男
林　努
中島　昭博
鈴木　誠
飯塚　優三
西　國雄
川合　利之
田中　昌幸
岡田歩久登
小林　直樹
小林　力
三村　到
藤田　尚美
菊池　健二
栗原志緒里
檜山　友佑
藤巻　史郎
高橋　浩治
伊東　直貴
古川　隆
西嶋　孝之
野口　貴宏
小深山浩通
有川　徹
田邉　宏志
関　真一
伊藤　宏治
篠宮　英一
中村　幸男
大津　敬一
兵藤　厚志
富永　公一
中富　仁
関　壮一
大塚　康信
植草　敬一
青沼　宏明
平林　利文
御園　秀一
和田　岳弘
藤澤　義和
山田　明弘
安部　英樹
大久保俊彦
高井　昭夫
園部　一之
武田　圭二
高山めぐみ
尾高　猛敏
茂出木敏雄
林　侑孝
福本　達也
西尾　英俊
北村　孝司
福田　康夫
鈴木　進
大澤　郁夫
清水　元貴
林　和宏
栁田　利幸
村上　豪厚
正法地紀之
田村　重雄
野谷　滋
原田　順子
穐本　晋介
田中　有弥
山本　一広
近藤　且章
宮本　圭一
村松　武
吉浪　譲
清水　博之
佐藤　雅代
原田　晃一
齋田　實
木村　輝彦
桑田　毅
佐藤　維麿
大塚　秀樹
平島　岳夫
天野　佳正

■ 9口 ■
佐藤　初美

■ 8口 ■
茂泉　健一

■ 7口 ■
坂口　守夫

■ 6口 ■
浅野　英昭
羽中田政樹

■ 5口 ■
岩瀬　充
室殿　一哉
栗山　健二
大塚　隆志
栗原　洋子
鈴木　孝志
浜田　孝夫
賀井伸一郎
杉本彩二郎
多々良邦弘
伊倉賢一郎
小笠原伊織
川口　晃平
梅田　正造
松本　恒雄
山田　憲司
地曳　広志
大澤　碩之
佐々木裕幸
守谷　祐之
日下部隆久
武之内教男
馬場　和幸
神谷　宏紀
岩村　響
笹川　俊勝
石田　琢
若松　永
高橋　通彦
島田　雅吉
岡島　直文
梁田　賢悦
高岡　理
堀田　明裕
鈴木　洋行

■ 4口 ■
金澤　伸春

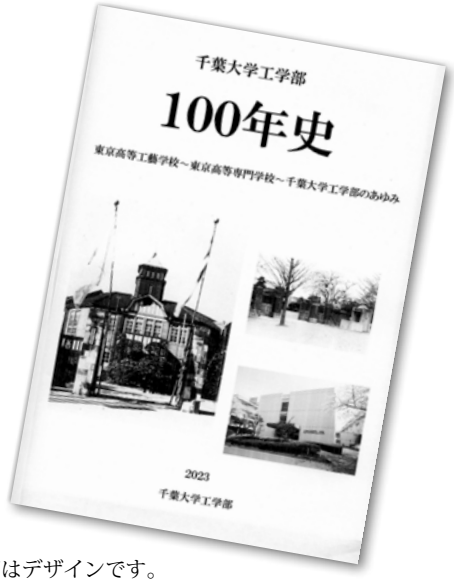
■ 3口 ■
廣瀬　喜明
竹中　一雄
大上　登
千野　誠
太田　泰男
田口　正信
永田　朗
村瀬　英俊
関澤　美紀
喜美候部継示
本間　靖彦
小林　孝至
香西　一雄
中村　淳二
西山　正春
大和田包明
緑川　文男
広瀬　正敦
花澤　周志
伊藤　修
影山　雅英
熊田　浩明
吉原　敏裕
塚本　允孜

■ 2.5口 ■
鈴木　正秋

■ 2口 ■
大沼　毅
安生　満
蛯原　貞夫
塩出　博教
水野　哲哉
河津　亘
井関喜八郎
相馬　一朗
笹村　智春
塚越　潤
野呂伊左美
杉山　武
廣瀬　喜明
三代川滋則
蝿庭　正信
田邉　喜彦
塚越　一基
松木　恭子
和田　侯衛
山崎　克英
石橋　範宣
田久保信也
小林　貞彦
瀬川二三男
林　宣雄
齊藤　裕之
加藤　次雄
淡路　延也
御園　信行
関根　清
鈴木　圭作
田中　満
斎藤　晴夫
柴崎　喜重
垂水　茂喜
雄倉　保嗣
手塚　辰保
池谷　友仁
佐野　嘉紀
梨本　一昭
鈴木　進
矢地　竹男
大澤　佑介
髙原　正弘
山田　陽二
寺田　重順
木下　理智
坪井　哲夫
藤澤　勝博
佐々木健一
境　祐司
山地　一夫
栗山　健二
浦和茂登男
千葉　全紀
金木　真人
浅野　盛治
川田　暢子
髙橋　正
犬飼　隆
赤沼　一弘
岡島　匠
米田　喬
酒井　伸和
芳村　友輔
瀬戸　守
三浦眞由美
川下真理子
楠川　則正
笹倉　敏夫
後藤　辰男
西村　淳
青木　基郎
細野　久朗
田中　純一
新宮領　慧
田谷　耕一
前野　誠一
遠藤　範夫
照井　與泰
岩本　正俊
蛯原　貞夫
谷口　昭文
小林　隆太
岩佐　和久
塩出　博教
上野　義雪

■ 1口 ■
荏戸　進
金子　亮太
小口　博義
畑野　肇
吉田　英雄
千葉　俊和
佐藤　洋一
大原　美絵
菅原　勝彦
田久保博之
米須　清英
藤﨑　浤
戸原　惹
浅沼　環
杉浦　一雄
山田　和則
関　繁松
篠塚　智之
榎本　哲巳
竹生　敏俗
阿部　徹彦
平山　元哉
加藤わかな
増田　啓司
長谷川隆史
田中　健太
田中　絹子
嶋田　優斗
三宅　伸治
上野　豊
細渕　安弘
相馬　太郎
伊藤　文隆
株本　正昭
佐藤　広直
半田　康紀
曽我部　撰
猪尾　幸永
川添　集朗
佐々木　聡
大沼　毅
花香郁太郎
谷口　碩彦

工学部創立100周年記念事業について



装丁はデザインです。
個人で10,000円以上、法人で100,000円以上ご寄附いただいた場合「100年史」一冊を贈呈します。

千葉大学工学部の前身は、1921年12月に、官立専門学校として東京市新芝町（現在の港区田町）に設けられた「東京高等工藝学校」です。よって、2021年には工学部は創立100周年を迎えたこととなります。

工学部では工学同窓会と共同で、工学部創立100周年記念事業を計画しております。本来であれば、2021年度に各種記念事業の実施を計画しておりましたが、新型コロナウィルスの影響を考慮して2022年５月21日（土）の総会において、誰もが安心して会食を伴う記念祝賀会に出席できるようになるまで、延期することを決定いたしました。記念事業の延期に伴い、寄附金の募集も引き続き実施いたします。なお、現時点（2022年９月末）までに、約1,329万円のご支援をいただいておりますが、目標額（３千万円）の約44％に留まっており、目標額の達成が困難な状況です。１万円以上拠金いただいた方には、「千葉大学100年史」を進呈いたします。さらなるご支援をいただきますよう、どうぞよろしくお願いいたします。

100周年記念事業の一つとして、ロゴマークを作成いたしました。デザインは本学OBの宮崎紀郎先生によるものです。本ロゴマークを記載したポスターを作成して、工学部の各所に掲示いたしました。

また、2022年３月20日（日）に開催された千葉大学墨田サテライトキャンパス（デザイン・リサーチ・インスティテュート）の開設１周年記念式典において、工学部沿革パネルを展示して、100周年記念事業の周知および寄附の依頼を実施いたしました。

100周年記念事業の大きな柱である「千葉大学工学部100年史」の発行は、記念式典、記念祝賀会などの事業についての実行記録を含めて完成させる予定でしたが、この計画は大きく変更を迫られました。また、編集作業もコロナ禍により、編集委員会の開催もままならず、大幅に遅れています。多くの執筆者の方々には絶大なご協力をいただいていますが、年史に必要な正確な年月の特定について、大学内に分散している資料を探すことに手間取り、順調な編集作業とは言えません。皆さまには事情ご賢察の上、今しばらく発行をお待ちいただけますよう、ご理解いただければ幸いです。

今後とも編集作業を早めるよう、一層努力して参りますが、古い写真資料が不足しています。皆さまのお手元に歴史を物語る写真や資料などがありましたら、同窓会事務局か100年史編集委員会宛にお送りいただければ大変ありがたく存じます。

工学部創立100周年事業の具体的な内容につきましては、今後も引き続き本誌を通じて、同窓会員の皆さまにお知らせいたします。

創立100周年記念事業実行委員会委員長
小圷　成一
「千葉大学工学部100年史」編集委員会・委員長
小林　謙一

千葉大学工学部100周年のロゴマーク

千葉大学工学部創立100周年記念事業
ご寄附のお願い（再掲載）

「千葉大学工学部創立100周年記念事業」（前ページ）をご覧いただき、趣旨にご賛同いただきまして、何卒ご寄附いただけますようお願いいたします。

■ 寄附金について

・個人　1口　1,000円
（2口以上ご寄附いただければ幸いです）
・法人　1口 10,000円
（10口以上ご寄附いただければ幸いです）

■ 寄附の方法

100周年記念事業への寄附は、「千葉大学SEEDS基金」を通して行います。ここに集まった皆様からの寄附金が、100周年記念事業の諸経費への支出に充てられます。この度、この方法を採用した理由は、「千葉大学SEEDS基金」への寄附は「所得控除」（右記※1を参照ください）が得られるためです。

寄附は、同封の「千葉大学SEEDS基金払込取扱票」を使用して、金融機関（※2）で振り込みください。これをもって100周年記念事業への寄附となります。

なお、SEEDS基金への寄附はクレジットカードを使用しての振り込みもできます。「千葉大学SEEDS基金」ホームページを使って、以下の手順で行ってください。この際、寄附金の使途を特定しないと100周年記念事業に使われないことになりますのでご注意ください。

（1）「千葉大学SEEDS基金」にアクセス
（2）トップページ中央下部「寄附する」をクリック
（3）「クレジットカードによるご寄附はこちら」をクリック
（4）寄附目的のプルダウンから「個別のプロジェクトへの支援」を選択
（5）支援先のプルダウンから「工学部100周年記念事業への支援」を選択

■ 寄附の特典

・個人で10口（10,000円）以上ご寄附いただいた方には「工学部100年史」（仮称：前ページ写真）を贈呈します。
・個人で100口（100,000円）以上ご寄附いただいた方、ならびに法人で50口（500,000円）以上ご寄附いただいた場合は、本学内に設置の銘版にご芳名を掲げます。

※1【寄附金に対する所得控除（免税措置）】

「千葉大学SEEDS基金」への2,000円を越える寄附金は、確定申告をすることで、寄附金額から2,000円を差し引いた額が、総所得から控除されます。送金後に大学から領収書が送られますので、確定申告の際にご利用ください。お住まいの都道府県・市町村によっては、所得税のほか住民税の「税額控除」が受けられます。当該の都道府県・市町村にお問い合わせください。

なお法人の場合の寄附金は、全額損金算入が可能です。

※2　次の金融機関では払込（振込）手数料が無料になります。郵便局（ゆうちょ）、千葉銀行、千葉興業銀行、京葉銀行、三菱UFJ銀行、三井住友銀行。

※3【個人情報の取り扱いについて】

寄附により取得した個人情報につきましては、本学からの領収書とお礼状の送付、寄附者の顕彰に関する業務のほか、本学から寄附者にご連絡する必要がある場合のみに利用します。

【お問い合わせ先】

千葉大学工学同窓会事務局内
「千葉大学工学部創立100周年記念事業実行委員会」
〒263-8522　千葉県千葉市稲毛区弥生町1-33
TEL 043-254-6358（月水金10：30 ～ 17：30）
E-Mail：chiba-u.kougaku-dosokai@nifty.com
URL：http://chiba-kougaku-dosokai.jp

総会・懇親会のご案内

2023年度工学同窓会の総会および懇親会を下記の通り開催いたします。皆様お誘い合わせの上、ご参加下さいますようご案内申し上げます。

記

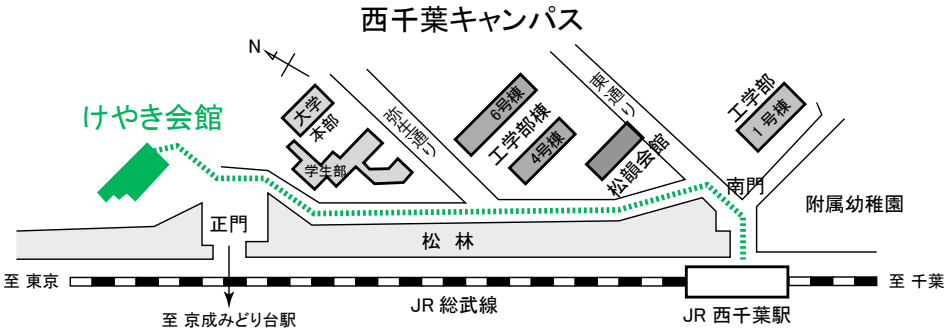
日　時　**2023年６月３日（土曜日）**　**受　付 13:30より**　**総　会 14:00～14:40**
懇親会 15:00～17:00

会　場　**（受　付）けやき会館・１階ホール**　**（総　会）けやき会館・１階大ホール**
（懇親会）生協食堂（懇親会からご参加の方も、まずはけやき会館・1階ホールにお越しください。当日、ご案内します。）

会　費　**２，０００円（当日受付にて）**

出席のお申し込みは、同封はがきにて2023年５月２日(火)までに事務局まで必着するようにお願いします。

※状況によって、総会・懇親会を延期または中止する場合があります。



学内地図の詳細はwebsiteをご参照下さい。**http://www.chiba-u.ac.jp/access/nishichiba/index.html**

会費納入とご寄附のお願い

●年会費納入のお願い

平成５年度の総会で会則が改正され、平成６年度より、特別会員（同校、同学部現旧教官、ただし正会員を除く）以外の正会員ならびに会友の皆様に、年会費1,000円を納入していただくことになっております。諸般の事情をご理解下さり、会費をご納入下さいます様、何卒、お願い申し上げます。

年会費は　1，000円です。

●ご寄附のお願い

工学同窓会の運営が安定的に行えますよう、会費に併せまして、皆様からのご寄附をいただければ幸いです。ホームページの充実、工学部資料室設置への協力など、毎年の運営費以外の事業費に充てられればと思います。

●年会費およびご寄附のご送金は

両方とも、同封いたしました郵便振替用紙にてお願いいたします。
なお毎年この振込用紙が同封されますが、すでに本年度分の年会費を前納されている方は必要ありません。

事務局からのお知らせ――おたより募集と住所等変更連絡のお願い

●会員の皆様からのおたよりを募集しています。

同窓生の皆様のための会報とするため、編集委員会では、会員の皆様からのおたよりを随時募集しております。同期会の報告や、皆様の近況、お仕事ぶりなどのお便りを、是非、事務局までお寄せ下さい。誌面の許す限り、掲載させていただきたいと思います。

●住所、勤務先、電話番号などが変わられた方はお手数ですが、同封のはがき、ホームページ上またはFAXで、同窓会事務局までご一報下さい。

●当同窓会では、会員名簿の管理、発行は㈱サラトに委託しております。最近、㈱サラト以外の業者からも、名簿刊行の案内がありますが、これは当会とは一切関係ありませんので、ご注意下さい。

会報編集委員：下村 義弘、平島 岳夫、鈴木 智、大森 達也、大窪 貴洋（委員長）、難波 一輝、劉 ウェン、平田 慎之介

発行　千葉大学工学同窓会　〒263-8522　千葉市稲毛区弥生町1-33　千葉大学工学部松韻会館内
電話／FAX　043-254-6358（月水金 10時30分～17時30分）
E-mail：chiba-u.kogakudosokai@nifty.com
印刷　株式会社サラト　〒670-0948　兵庫県姫路市北条宮の町172番地　電話 079-284-1380　FAX 079-224-7746